



PART 4



その一

先輩からのメッセージ

- 天才／繁野 三郎 276
- 連盟30周年を祝す／藤野 高常 276
- 楽しかった大会／朝倉 力男 277
- 絵による対話／宮林 繁雄 277
- 創立30周年に寄せて／畠山三代喜 278
- 私のホームグラウンド／泉 秀雄 278
- 写生と模写／橋本 富 279
- 造形教育をいとおしむ／荒木 愛子 279
- ささえてくださった方よりのメッセージ
- 造形連盟との「きずな」とその流れ／大寺 正 280
- 連盟に育まれて／後藤 卓生 281
- 連盟と私／清水 昇 283

その二

座談会・連盟30年をふりかえる

その三

- 委員長／伊藤 恵 302
- 連盟30年と連盟30年／長谷川 伝 308
- 感想／榎市誠次郎 310
- 連盟は私のふる里／成田 一男 310
- 三才の造形教育のすすめ／荒川 恵吾 311
- 80年代の強力なエネルギー源として／坂田 武夫 311



○小さな草花／高橋 清 312

○新緑／菅原 陵三 312

○喜びのある造形教育／新谷 純純 313

○逆に感動させられたこと／平山 満 314

○美術教育におもう／葛西 良子 314

○児童園審査会／伊藤 英世 315

○造形連盟の底を流れるもの／後藤 誠功 315

○造形大会と私／榎子 信也 316

○いまの私／鈴木 幸司 317

○子どもと造形あそび／鶴賀 孝三 317

○支部の事務局員として／岩間 敏仁 318

○造形連盟中学部とは／村谷 利一 318

○各教科の泉としての造形道大会／長野 祐平 319

○わたしと造形連盟／藤塚 愛子 319

○私と造形連盟／花田 正雄 320

○造形連盟の明日／毛馬内国夫 320

○ふり返ってそして現在／富所 玲 321

○美観大会のこと／今 裕子 321

○鬼と交戦中／菅原 清貞 322

○美術教育を支えるもの／広沢 正俊 322

○色の存在感／富田 泰 323

顧問からのメッセージ 先輩からのメッセージ



天才

藤野 三郎

私が写生をしていると、よく聞かれることは「ながく画いていますか」で、答は「はい」だが、虫の居所によってか、相手次第で「ながく画いてもさっぱり伸びない人もいるし短

くてもよい絵をかく人もいますので、余り時間は問題ではありません」と教師振ることもある。ところが時には「プロですかとか、商売ですか」とくるのがある。それこそ頭にかちんと来る。とつさに「趣味です」とか、「好きで画いているんです」と答えてしまふ。と相手は「私も好きなんですが才能があるかどうか考えているんです」という。

苦勞している最中に、家人にとがめられはしまいかと、遠慮しながら、寝床にもぐってから、こつこつと、先ずクレパスでマツトの切れはしに画きだしたといつて、見せてくれたことがあった。最初はその物だけで、バックなども画いてはいなかったが、社長から会長になった頃には、画室にこもつて、油絵の写生を楽しみ、グループ展の参加はしばしばでチャールズ会の会員でもあり、パークホテルの画廊で個展を開くにも至つた。好きでたまらないうのが、永続する人こそ、真の天才で、手先は器用だが怠けぐせが出るようでは天才ではあるまいと思う。



連盟三十周年を祝す

藤野 高常

北海道造形教育研究連盟創立三十周年を迎え慶賀に堪えない。終戦後まもない頃新教育建設の為に図画教育に関係の深い札幌の先生

方が幾度も当時の西創成小学校に集つて色々相談したこと等が回想されます。其後の研究会が開係諸子の絶大な努力に依つて全道的な連盟組織に発展し今や全国的にも有数の研究団体となつて今日に到つた。爾来実に三十二年困難な事情を克服して今日を迎え喜びに堪えない。特に昭和四十五年以降は毎年夏季道内概要の中心地に大会を廻り持ち図工教育の為に氣勢をあげた実践は絶大なものであり敬賀至極である。本部諸役員各地区諸役員方の

ご努力ご功績を忘却してはならぬ。さて考えるに近年経済成長機械生産等の隆に日常生活文化が一般に規格化、画一化、量産化されて自然風致や人間性が到る所で喪失される現象が見られるのが残念に思う。人生の幸福とは自己を発見しその能力思想を以て環境を創造してゆくことであろう。新しい文化を築く為に真の美術教育のあり方を再考し愈々北海道造形教育研究連盟のご発展を祈念して上まない。(十月末日)



楽しくなつた大会

朝倉 力男

第一回の札幌大会の時は、旭川から出かけて、沢山の方から色々なお話を聞かせていただき、大変勉強になりました。最初の催しであつたので、どんな事になる

のか心配なこともありましたが、大きな成果を納めることが出来たような気がしました。そしてこの催しが永く続く事を祈つて帰りました。

第三回の旭川での大会には「環境と色彩」の関係についてお話を致しましたが、今考えて見れば汗顔の至りと反省致して居ります。

第二十四回の旭川開催の時は公開授業者のリハールに呼びだされ、授業者と一緒に勉強したことが思い出されます。

第三十回を迎えるにあたり、よくぞ続いたことに思いを込めずにはあつて、当局者の方々のご苦勞の程を感謝すると共に、会のもとらしたものは、言葉では言いつくせないものがあり、大会の内容も年々変り、開催地の特色を生かして、楽しみながらの研究の場へと変つて来ていますが、教育者養成のあり方及び教育行政の問題を考えると、種々の問題はあるとしても、今後この会のいつまでも続くことを祈ります。



絵による対話

宮林 繁雄

国際児童年に当てて、日本の児童画四百点とアーティスト会員の作品三五点を携え、ルーマニアへ発つたのは十月二日であつた。皇太子夫妻の同国親善訪問の時を同じくして、首都ブカレストで親善美術展を開催しようというユネスコ美術教育連盟の企画によるもので、

同共和国美術館を会場に、六日には同国政府対外文化担当官をはじめユニセフ、ユネスコの各総裁、ルーマニア大学総長の参列のもと盛大なオープン・セレモニーが行われた。今もって感激さめやらぬことは、この時白いブラウスに赤いスカートを着けた可愛い制服の小学生たちが会場一杯に整列し、みんな輝く瞳を凝らしていたことである。ルーマニアの児童画は概ねデコラティブでお国柄と永い伝統がしのばれるが、日本の子供は殊に生活心情を思いきり画面に表出しており、国を離れてそのことがより一層鮮明であつた。

翻つて、北海道の土壌に根ざした造形教育連盟が結成されて三十年。当時は全国的にも

新たな美術教育の黎明期でもあつた。第一回の大会テーマは「情操教育の一環として本道図工教育の進展をはかる」であつたが、その後各地での研究はその広がりと深まりとを、まこと、目まぐるしいまでに推し進められここに三十のテーマを重ねるに至つた。当地区に留まらず全国的な視野から現場におけるその精華は、ブカレストでの日本児童画展で垣間見た情景ではあるが、おそらく世界の子供たちの目を大きく見張らせ、強い感動を伴つて心と心の対話を齎すに至つていふことを、私はこの目で確かめることができた。

ここに連盟の三十周年を稱え、八十年代に向つて新たな進歩を心から望んで止まない。



創立三十周年に寄せて

島山 三代書

北海道造形教育連盟が創立三十周年を迎えたことは誠に喜ばしい限りであり。心からお祝い申し上げます。



私のホームグラウンド

泉 秀雄

第29回の全道造形教育旭川大会に招待を頂き、若い会員の皆様の仲間入りをして、その元氣な息吹きに触れ、昔の第30回、第20回の地元旭川大会のことなど思い出し感慨深いものがありました。

写生と模写

橋本 富



パリーから汽車で三時間ばかり行ったところに、オンフルールという古い漁港がある。ここは常時世界中の画家が集まるところで、僕も氣に入って滞佛中二度も出かけた。二度目に十日ばかり滞在した時のことである。

造形教育をいとおしむ

荒木 愛子

私は連盟にいる間じゅう、お茶くみさえもじょうずではなかった。女はいつどこでもお茶くみがへたではないかと思っている私

私が昭和二十六年に札幌分校に奉職した時は、北海道美術教育会が発足して間もないころであって、S教授が会長となっていた。会長の椅子をめぐっているような動きがあり、会の運営に何かと支障をきたしていた。その後この会を全員退会して今日の北海道造形教育連盟と名称を変えて野村先生が委員長となり、幼、小、中、高の教育現場の先生方が主体となつて、会の運営発展につとめてきたことは、極めて正解であつたと思う。当初、教科書会社や図材会社の援助を受けながらも北海道の美術教育の向上発展のためにつくした功績は大なるものである。歴代委員長を中心

に各委員の努力した結晶にはかならない。教員養成の立場にある教育大学の一人として側面から充分に力をかすことができなかったことは深くお詫び申し上げる次第である。しかしながら我が大学の美術研究室に学んだ数多くの諸君が造形教育の現場にあり、連盟の推進力となつて力強く羽ばたいていることに、心から喜びを感じている近頃でもあります。創立三十周年の歴史の上に立つて北海道造形教育連盟の限りなき発展と、本道美術教育の今後の力強い歩みを心から願つて止まないのであります。

昭和26年初冬、連盟結成から今日まで起伏の多い長い歳月の中で、私連会員はよく切磋琢磨し、夏が来て大会参加が最高の楽しみであつた。

戦後の美術教育は混沌の中に創造教育が一石を投じ、その波紋は瞬たくまに全国に波及していった。本連盟も第二回札幌大会にイギリスの国際セミナーから帰国させた室靖氏を迎え、「こどもの絵をもう一度見直し、その指導を考えよう」という原点にかえり、こどもの作品を前にして、目を輝かせながら討論を重ねたものだ。その後の連盟は、旭川を皮きりに逐次、全道的に大会を開き、講師陣の

あると思う。

僕は、午前と午後場所を変えて、だいたい六号一枚を二日位で仕上げていたが、僕のそばで描いていたフランス人は、十号位の絵を描きつづけ、それも空ばかりを三日も描いていたのには驚いた。煙草をのんだり、そばのコーヒー店に入つたりといった状態で、実にゆつたりとかいていた。

絵の仕事というのは、めまぐるしく動いている社会の瞬間のパッションを、静止した状態で、画面に定着させることだから、あわてふためいてはいけな。走りまわっている社会にまどわされることなく、じつと自然を見つめていることに、かけがいのない生き方が

が、である。ましてや連盟の内容についてときたら全くの無能なのであつた。

そんな私が長らく連盟の末座に、楽しく居心地よく座らせていただけたのは、その何とも言えないぬくもりに包まれていたからだつたと思う。かつて私が模索して何かをやろうとしていた時「それでいいんだよ。がんばりなさい」と肩を叩いて下さったのが、時の委員長野村先生であつた。私はこの上なく感激した。それが連盟であつた。

連盟は新人を発掘して励まし造形教育を進めてきた。そこには上も下もなくひたすら信頼と敬愛があつた。しかも、その上で長幼の

ルーブル美術館に入ると、暗がりでも何日もかけて模写している画学生がいる。日本人はそんな余裕はないとばかり、常に新しいものを追いまわっている。この頃、僕は本気で、美術教室の生徒に、「うまくなりたいなら、好きな作家の絵を、何枚か模写してみなさい」と云つても、とても、そんなひまはないといった願つきである。

人間走りまわっているのは、よい仕事も、よい考えもつかない。先人の足あとを、ふりかえつて見る時間もほしいものだ。

礼があつく清潔なのであつた。

中央の大会やゼミに連れ立って参加もしたが、何といつても全道研究会のための研修会その緊張と充実感に忘れがたい。全道各地での創意あふれる前夜祭の楽しさは、またなつかしい。創美の全道ゼミを札幌で開いた時(久保貞次郎、池田満寿夫氏も参加)運営に当たったのはすべて連盟の仲間であつた。みんな造形教育をいとおしむいちずきにあつた。

連盟とは、そういうところであつた。今もそうであるにちがいない。

なつかしく思い出すこと、しきりである。

「支援くださった方よりのメッセージ」

造形連盟との「きづな」

東京書籍（株）北海道支社長

太 青 正

北海道造形教育連盟が創立30年を迎え、記念事業の一環として30周年記念誌を刊行されるという、まさに造形連盟の輝かしい歴史の記念塔であり、心からお慶び申し上げます。同時に永かった茨の道を切り拓き、さまざまな辛酸をのり越えて今日の基礎を築かれた連盟先達の多くの諸先輩の皆さまと、その偉大な精神を継承して全道の造形教育の発展に精進される連盟の皆さまに、表心から敬意を表したいと思います。

願ひみまずと造形連盟と東京書籍の出あい

は、ゆれ動く戦後教育の大きな変革の最中にあって、まさに歴史的なものでなかったかと今改めて当時を想いまことに感慨新たなものを感じます。昭和28年8月連盟は「北海道版図工教科書」の編集を決議しその発行を東京書籍に要請、次いで同年9月26日労働会館に全道地区委員が参集してあの画期的な全道図工大編集会議が開催されました。連盟と東京書籍の実質的な連絡関係は、この大事業によって、この時第一歩を印したと言えましょう。その間初代野村委員長以来、現社委員長に至るまで、皆さまにそれぞれ美術教育を通じてご交際いただきましたが、特に私共の生命である教科書については、前の北海道版図工編集作業を通じて、或る特定の期間は全道的な組織の動員により、強力にご協力いただき、地域性を充分配慮した教科書内容の向上に、ご盡力いただいたことが、今振り返って夢のようなことであります。

その後特定の教科組織との関係が公正なる教科書採択に問題ありと、行政当局の指導、同業他社からの批判もあり、昭和46年度を喫

機に、連盟から、競合他社と等距離、等間隔に申し渡され、歴史的この大事業は終止符をうったわけです。

それ以後のご交際については、むしろ旧に倍し、会社としては神経を遣い、委員長はじめ幹部の皆さまに接して参りましたが、何れの方々も全道組織を運営なさる長として、独自の個性をもつ方々の集団を上手に運営している姿は、私共企業を運営するものにも随分教えられるものがあつたと常日頃感じ入っている次第です。

連盟幹部の数多くの方々に、それぞれに多くの想い出を残していただいています。特に近年編集に直接のご参加が無くなって以来教科書に対する情熱は、それぞれに独自の個性をお持ちで、表現の仕方は異なっていたが、可成り厳しい、細部に亘るご批判を頂き、その鋭い感覚と、斬新なアイデア等、次々に出されるご批判に編集部をはじめ在京の委員が、目を白黒させ応待している様子に、日頃我々営業が意見具申していることの具体的な教育的裏付けの証左なりと、編集関係者に対

し少しばかり溜飲を下けたものでした。

歴代の委員長さんは、作家として優れているばかりでなく、会をまとめる政治的手腕もある上に、猶且つ個性の強い方が多く、おつき合いの中で、いろいろ忘れられぬことが数多くあります。それらを書く一人、二人で紙面を費してしまふ程ですから割愛させていただきますが、故人となられた新妻先生、又不慮の死を遂げられた赤石先生のことなど特に心に強く残っています。

造形連盟30年の足跡には輝かしい過去ばかりでなく、流れの中には幾多の、苦難の途を歩んだこともあつたと思われしますが、幹部の方々が、そして若い組織の人々が、手弁当で組織の発展と教育美術に奉仕した幾多の実例を見聞きして来た私共には、同じ道を志し、同じ職業にたづさわっている、仲間意識から生まれる団結力の強固さを感ずる次第です。

連盟の先生方は、一面芸術家の集団でもあるわけで、この意味では自己主張が強固なのが常なのですが、連盟の先生方と接している限り、全くそんな雰囲気を感じさせないものがあります。ある時は談論風発着ることなき、芸術論であつたり、口角泡を飛ばす激論であつても、少しも飾らずに、平気で打ちの

めしあつてゐる姿、妥協なき追求する道の厳しさなど、総べてが明日の教育を考え、明日の児童生徒の俸せを夢見て語る、尊いものであります。

斯くして30年の歴史の輝かしい足跡が生れたのであります。権力を望むものは、権力におびやかされると言われますが、少くとも連盟30年の歴史の中にその陰影すら発見出来ず、上下一体、先輩は常に後輩のことを念頭におき又、後輩は常に先輩をたてての一連の流れの中から、今日の連盟の状態で、断層をつくることなく、連綿と続くきづなとなつていくことと信じて止まない次第です。

連盟に育くまれて

株式会社サクラクレパス札幌営業所長

篠 藤 卓 生

北海道造形教育連盟が結成されて30年、この北海道に深く根をおろし、日夜献身的に造形教育の成長発展にご努力され、現在の連盟に築き上げられましたことは本当に慶賀に堪えません。

発足当時におられた先生方が今は連盟の運営そして北海道の教育界で中心的立場でご活躍されているのを拝見し、先生方のいつも変らぬ子どもたちへの情熱に敬意を表します。

30年前といえ、戦後の混乱が治らず、国

情は不安定で、食べるものすら満足でなかった時代だったと思います。

当時私はまだ小学生で、疎開先の九州で、来る日も来る日もサツマイモと、米の姿が見つからないよう、雑炊で飢をいやし、画材はもとより、描く紙すら満足になかったことが思い出されます。

南国で育った私が不安と新しい土地への期待を抱いてサクラクレパス札幌営業所に転任してから七年、第二の故郷となった札幌の地で、連盟の先生方のお付合を離れては考えられない毎日です。

四十八年、飛行機の上から見た北海道の大地の雄大さに感動した思い出。又営業所に着任して、あまりにもひどい社屋に胸が痛んだこと。セールスとして札幌市内を担当し、古い連盟の名簿を頼りに学校訪問をした時「サクラさんはまだ札幌に事務所を構えてやってるの」とか「最近全然御無沙汰だね、サクラのセールスが来たのは何年ぶりかな」と言われた苦い思い出があります。

その当時は、先生方との馴りもほとんど止絶え、おのずとサクラ協賛の行事は皆無に等しい状態でした。

何んでもよいから連盟のお手伝い出来るも

大きな喜びであり、何にも変えられない財産でもあります。

拡大な自然、心あたたまる先生方とのふれ合い、会合の後、三々五々と新雪をききませながら炉ばたで飲み交した酒の味、実技研究会等でのユーモアあふれる先生方のお話。どれを取っても生涯忘れ得ないことばかりです。

時代が変り、人が変わっても、造形連盟の根底に流れる人の心を最も大切にすること、気持は確実に後世に引き継がれていくことでしょう。サクラクレパスとしても、連盟の先生方との出会い、そしてふれ合いを大切に、先生方の御助言、御支援のもと、子どもたちが描く楽しさ、造る喜びを味わってもらえる良い製品造りに努力しなければならぬと思っています。

無気力、無思考、無感動の傾向がみられる現在、北海道造形教育盟が広い北海道に、どつしりと根をおろし、未来を背負っていく子どもたちが、確かで豊かな感受性を持った人間に育つよう、一九八〇年に向って、羽ばたきご活躍されますことを心からお祈り申し上げます。

のがないかと学校PRを続けてい折、高橋栄吉先生より、全道の小中描画展のお話、又、連盟札幌支部から機関紙のお話がありました。渡りに舟と、サクラで協賛させてもらったものの、これはとんでもない手間のかかるものを引き受けたと、内心配したものです。

しかし、連盟の先生方の骨身を惜しまぬご努力で、今では連盟の中心的事務となり協賛メーカーとしても先生方の子どもたちへのしたむきな情熱と和に感謝すると同時に、心から感謝している次第です。

北海道教育美術展は7回目を迎えるようとしており、学童展では勿論道内一の規模と内容を誇り、道内の造形教育のレベルアップに立派な実績を残されています。恒例となった年末の審査には、札幌市内の連盟の先生方が四十〜五十名も集まり、和気あいあいとした中にも厳しい眼差で審査されている姿は、子どもたちへの愛情と、造形教育への熱意なしには出来ないことだと常に感じております。

又、札幌支部の機関紙「造形短信」も編集部員のご努力です。8号を数え、内容もユニークでとても楽しいものとなっています。

当初は原稿が集まらないと編集の先生がもたしているのを何度か耳にしましたが、今で

連盟と私

べんてる株式会社 札幌支店

札幌支店 画材販売課長

清水 昇

創立三十周年記念誌発刊に当り私と連盟との係り合いを掲載して頂けることは、長い間連盟と共に歩んで来た私にとりましては、この上もない光栄とよろこんで寄稿させて頂きます。

私と連盟との係り合は、入社時より十九年間に及びますが、その過程を三期に分けることが出来ます。

第一期、私が今のべんてる株式会社（旧大日本文具）に入社したのは、昭和三十五年社会党選挙委員長が豊原山口少年におかれ、刃物を持たない運動が展開される四ヵ月程前でありました。入社時の面接試験の三人の内二人は連盟試験官の野村委員長と札幌大の島山三代喜先生（連盟顧問）でありました。事をみると、入社前より既に連盟の先生には、お世話になっていた訳で、連盟の面接試験を通り入社したと言っても過言でない関係があ

は始めの約束の四頁ではどうしても収まらないと、六頁になり、この頃では八頁が通常になっております。それだけ先生方が「短信」に感心を持たれ、楽しみにしているからだと思えます。ただ、サクラのコーナーの内容がいつもおそまつで、切角の「短信」をだいたしにしているのではないかと、いつもはらはししながら、といたばかりの「短信」を読んでいます。

春には、幼稚園の先生や保育園の先生を対象に幼児造形教育研究会が一泊二日の内容でサッポロハイツで開催されています。

連盟の先生方の献身的なご協力で今年で六回を迎え、幼児園にとつて、大変期待されているセミナーとなっています。

そして、五十一年九月、民家とも倉庫ともつかないぼろぼろの営業所に別れをつけ、現在の新社屋が完成。九月三日の落成パーティーには市内の沢山の先生方にご出席をいただき自分のことのように喜んでいただき、祝つて下さったこと。その時、記念にと書いていただいた色紙のよせ書きを見るにつけ、昨日のことのようにその時の感激が伝って来ます。

北海道に赴任してから、すばらしい先生方とお近づき出来たということは、私にとつて

ります。又その頃はクレヨンがべんてる、えのぐはイーゼルペイントと資生堂絵具が、北海道のえのぐ市場の七十%を握って居たと言っても良い程強く、当時の井上支店長が、「今は三年生迄がクレヨン、パスを使用しているが、将来は一年生よりえのぐになる」。その時のためにえのぐの宣伝をしない。相手が強いからと戦を挑みもしないで尻込していたのでは、無難な合戦だ。当って砕ける品質はべんてるの方が良いのだ。」と激を飛ばされ、恐る恐る図工の先生を訪問、「べんてるのえのぐはこんなに良いのだ。」と驚たての商品特長を説明して歩き出したのが、翌年からであり全道各地の学校に出発したのが係り合いの始まりであり、滝川大会（十一回）から四十三年の苫小牧大会（十八回）まで、八年間は毎年全道大会に参加致しました。中でも十三回の余市大会は、町の旅館が少く泊れず、これ幸とばかり浜辺にテントを張り、キャンプファイヤーを囲んで酒を飲み合い、朝までさいわいでの大会参加は今でも忘れられない大会の一つです。又初代野村委員長二代目新妻委員長が退職後、べんてるに入社され北海道幼年美術会を結成致し第六回研究会を開催されたのはこの時期であります。

座談会 連盟三十年をふりかえる



とき / 昭和54年12月27日 午後1時30分～3時
ところ / 札幌市立西野第二小学校

司会 皆さまごろうさまでした。連盟も
発足いたしました。今年で30年を数えるとい
う年になりました。師走の忙しいところお集
りいただきましたありがとうございます。ほ
かの場所では、連盟の一つの事業である教育
美術展の審査が平行して行なわれている中で、
今日の座談会が開かれているわけです。振り
返ってみまして、二十年という大事な一つの
節の中で、連盟の発足当時の事とそこで、活
躍されました先生方をお招きして、お話を聞

出席者		司会者	
野村 英夫 / 初代委員長	伊東 将夫 / 五代委員長	金井 秀男 / 記念誌編集委員長	東志 隆 / 鈴木 将夫
高橋 栄吉 / 六代委員長	伊藤 恵 / 記念誌編集顧問	辻 悦平 / 現委員長	加藤五十和 / 編集委員
森川 昭夫 / 事務局長	中村 幸夫 / 中学部責任委員	中村 幸一 / 高校部責任委員	
豊田 幸夫 / 中学部責任委員			

6
7
8
9
10
11
12
13
14

第一期は、雲隠れの期とも言いましよか、
四十二年十一月より五年間道外追放？（海外
三年、東京支店二年間）され札幌に帰って来
た四十九年より五十二年三月まで支店內勤で山
崎社員の際で糸を換っていた時代が四年間あ
りました。
第二期は五十二年四月より札幌支店の画材販
売課長の辞令を受け取ってから直接先生方を
訪問するようになった現在であります。
昨年辞令を受け取ると共に活動を開始したの
が、第一期に六年間実施して効果の上った、
北海道幼年美術の会の再発足を計画、実行の
段階でいろいろな問題が起きて参りますが
辻委員長のご助言を頂き、前記の畠山教授を
会長として発足することが出来、多くの連盟
の先生に実技講師、及び助言者をお願い致し
、一回の夏期大学を盛会に開催出来ましたのも、
連盟の諸先生のお陰と深く感謝致しておるこ
ろです。

協賛会員

- ◆ サスラクレパスK.K札幌支社
064 札幌市中央区南4条西13丁目、☎563-5161
- ◆ ベンてるK.K札幌支店
061-01札幌市白石区大谷地227の87、☎862-8921
- ◆ セメダインK.K札幌出張所
060 札幌市中央区北1条9丁目、☎261-1471
- ◆ 北海道陶芸KK（北陶社）
060 札幌市中央区2条東6丁目、☎251-7330
- ◆ 寺西化学工業K.K（ギター）
062 札幌市白石区菊水5の3北商KK内、☎841-1211
- ◆ 開隆堂出版KK北海道出張所
060 札幌市中央区南1条西4丁目日の出ビル内、☎221-7201
- ◆ 東京書籍KK北海道支社
060 札幌市中央区南1条西3丁目札幌ビル内、☎241-8987
- ◆ 日本文教出版KK札幌連絡所
001 札幌市北区屯田町327の97、☎772-3793
- ◆ 野幌陶芸社
069-01江別市野幌町9番地、☎01138-2-2737

いたりあるいは、連盟の中興のお仕事をなさいました先生方をお招きして、お話を聞いたり、あるいは、これから、こうあったらいいじゃないだろうか、という未来に向ってのご提言をいただくために、先生方をお招きしたというわけで今日は、大変実のある座談会が、できるんじゃないかと期待しております。それでは最初に、昭和25年に、この連盟が発足した当時の会長さんであります野村先生から、発足当時のことをひとつお話しください。

◆連盟ことはじめ



来まして、そして私達の模範の図面工作の大会があつたわけですが、北海道にも、ぜひ、そういう会を催したらどうかというような、提言があつて、そこから、二十万円を私がいただいた訳ですが、それは、北海道の全部の作品を集めて、それを審査した訳ですが、そのお礼として、美術教育の基礎として二十万円

島達四郎

高橋 松田義之といったら芸術大の教授だったつけ

伊藤 その時札幌美術連盟といつて25年の
附属で研究会をやった時には、北海道美術教
育会と名前が変わったんだね。

野村 実わったというのは、金道の参加された先生方の發意でね。あの時發案されたのは、小樽の三田シユウマツという先生が、大声でね、ぜひ北海道全体ということだね、

司会　ですから、結局は、25年にですな。正式な形で、北海道という名前が、ついたということになりますね。

野村 まあ、26年の11月24日にね、薬師会館という所で、全道の30名ぐらいの人によりましてね、会を開いた訳です。そこで小学校

中学校だけの連盟を作るうじやないかという
声が、高まって、そこで総会が、あつた訳で
す。その総会には、組合の委員長とか、書記
長をやっている千葉大作が、教育評論社の
石附忠平さんや櫻井忠さん、道からは、土井
さんを呼んで大々的に、開いた訳ですよ、11
月24日ですよ。

司会 その後27年には、大塚立派な先生
おいでなさんです。室靖先生だとか、

のをやっていたんだわ。

森川 講習会みたいなものね。色彩教育の。
伊藤 松田義之という人とね西田昌之、高

とか、二年の学習とかという名前で毎年変えてきましたね。

野村　そうですね。

伊藤　でね、絵なんかもね地方からちよつ

と集めたりしたんだけどね。それがなかなか、うまくいかなくてね。あの工作なんかはね、まあよくが担当してたところでは、自分で陰

を描いてね出す訳ね。それが本になつて、出てきて、いいもんだなと思つてね。自分達で

本を作れるなんて夢にも思っていないからね。大変感動して毎日うれしく暮らしてました。

伊東 ぼくらも、請負わされて、あの時す

でに子供のものを採り上げていたでしょう。ところが、地方には、うまいのがないんだよな。で、しかたないんで、早くが、子供の

絵に似せて描いたんだよなあ。

司会　ほんとですね、この様な教科書を編

集したというのは、まあ、長野の信濃教育会と並んでですね、こういう仕事で、出来たのは、意味のある仕事だと思えますね。その当

時どうでしたか、辻先生
辻 石狩の方からね、編集委員に呼ばれまし

てね、丁度その前に私が、石狩で基底案を作

つたもんですからね、渡辺磯松さんから、色々指導を受けていたんです。それで単元というのを、題材として考えたらどうでしょうかと意見をのべた覚えがあります。そして、その時、いろいろな先生が、じつは、各教科ごとに、単元的な考え方によって、編んでいるんだということですけど、結局、出来たものは、題材に訂正をされたものでしたね。

司会 まあ、あの頃コアの意見が強かった時代ですからね、ところで連盟が、全国大会をもつてこうという、気運が、ですね、出て来た、連盟の組織も、徐々に固まって来て北海道の力を示そうということで、全国大会をもつてこられた訳ですね。その時のエピソードが、ありましたら、お話ししてもらいたいと思います。

伊藤 あのね、室靖さんが、来た時、ぼくは、室靖さんの講演というのは、すごく印象に残っていてね、それから湯川さんの授業はねちよつとつけたしの様な授業だったんだよね。

◆創美について学ぶ

野村 ぼくからもね、その当時、創美の授業は、どんな授業をやるのか、非常に興味深か

つたね。あの写生を一つやってほしいといつて、お願いしたところが、写生なんか、出来ないといつてね、「創美を教える者として」、「じや先生の好きなものをやってください」といって物語「浦島太郎」の絵の授業をしていたできました。その授業の進め方は、非常にうまくいった。大事な所になるとカメラを撮いたり浦島太郎を描いたり、龍宮城を描いたりして、急所、急所を、うまく、子供と一緒にやって。それで子供は、とても喜んで描いた訳です。

湯川さんは、ちよつと批評したりなんかしてね。まあそういう様な授業でしたが非常に反響は、大きかったです。創美のことは、いろんな雑誌や本にのつていたけれど、初めて、創美とは、どんなものがわかった訳です。で、その当時荒木愛子さんは、自分の描いた絵を持ってきて、湯川さんに批評をしてもらったりして、非常に刺激が多かった。それに、和田さんが湯川さんに札幌に来たら朝から晩までひとつ何でも、こき使うぞという訳で、非常に大先生に対して失礼な事を発した訳ですが、和田さんは朝から晩まで道を歩いていても湯川さんは黙って歩くことは、なかったですね。いつも、美術教育を互いに論じ合つてね、一つも休まない、非常に面白か

その当時のことを、

◆第6回大会初の全国大会のこと



川 ぼくはね受付をやっていたんでね良く覚えてます。やっぱりあの今泉さんですか、それから勝見さんと井手さんの三人をね東京ででも集めることが出来なかつたのに北海道で一堂に会して論争をやらせましたよね。東京から来た人達が、すばらしい講師を呼んだものだとも今でも語り草になっています。

野村 あの時は、非常に力が強かつた千葉大学の森桂一さん、森さんは、たびたび北海道に来ていまして非常に私とは親交をあつていた。それで北海道で誰れを選定したらいいかどうか、相談したらね。いい講師を選定するから私に、まかせてくれということと森さんにまかせたところ今泉さんと勝見さんと井手さんを並べた訳ですよ。でまあ当時今泉さんは、勿論、勝見さんも権威者だね、井手さんは、あの当時の若手としてのいい意見をもつていたね。この三人を組合せて戦わしたら、非常に面白い事になるんでないかと

つたです。

司会 熱心な、そういう頃の研究は、全国の教育思潮と一致している形ですね。



伊東 あの、室さんの話の中心は、やつぱりハーバード・リードの思想を基盤としたものでしたね。特に戦争というか、平和を維持する為の人間教育という

う角度からね、あの闘争心は、いかにして起さるのかと、その闘争心を、いかにして、良い方向に解消していくかということね。ぼくらは、感動して聞いていた。ぼくらは、その頃、創美というものは、知らなかった。ところが、湯川さんの授業はね、何であそこにも浦島太郎をあやつて描いたかということがね皆疑問だったんだよね。創美の典型を示しちゃつてね、そして描き描けてね、ちよつと、あれも一つの方法としてやつたんだらうけどね確かにうまい授業であつたけど。

伊藤 ぼくはね室靖さんのね話の中で今の事も印象的だったけど、たびたび、くり返して言つたのはね、創美のね、いい所だけをとり上げようとしたんでは困るというわけ、取るんであれば、全部とれというわけ、取る

いうようなことで、森さんが考えてね、よく来たよね。あの三人が顔を合わせるなんて、北海道じゃなきゃできないよね。

中村 森さんと好意のあつた先生は、戸坂先生でしょう。

野村 そう、美術学校の同期生だからね。中村 何度か、よく私たちもその話を聞かれましたよ。

野村 この大会を開く前は、随分苦労があつた訳です。第5回の金沢大会で、ぜひ北海道に来てやつてくれという訳です。はじめは青森か秋田でやるはずだったのが急にやれなくなつた。それじや東京を乗り越えて、北海道に、と言われた。その時私が、北海道からただの個人で出席した訳ですから固く断つた、まだまだ北海道は全国並に行つてないから、まあ、いづれやるけれども、いい時が来たらやるからと言つて下つて来たんです。第7回全国大会（仙台）から帰つてきて、「北海道で、ぜひやつてくれ。」と攻められたという訳です。それで、どうしても、これは、やらなければならぬと覚悟を決めた訳です。しかしまだ実践授業はなかなか札幌で、やるといつても、ゆるくないから条件を出した訳です。そして条件は、授業は、まだ出来ない

からやらない、ただディスカッションだけ三日間ゆっくり一つやってくれということでした。解を得た訳です。それで授業はやらないで、その時は非常に助かった訳です。そして、それともう一つの条件は、それまでの大会参加費は、三百円でしたが、それを北海道でやるのなら金がないから、二百円上げて五百円にしてくれとゆうことを出しました。北海道でやるのなら全部呑むということで、全部通ったんだけど、さて、会を開くための苦心は、大変なものだった。全道からとにかく、主だった人を、産業会館、今は、ないけれどね、集めて、全道に札幌大会呼びかけた訳です。いざという時には、皆はせめて、一つお手伝いをさせてくれ、研究発表もさせてくれということで、全道から人が集まってそれは大変苦しかったけど、たのしかったです。

森川 昭和35年ですよね、そして研究発表会をアカシア荘でやったんです。第1回は、伊藤 研究発表をやらないうね、地方から出てくる人が、つまらないですよ。必ず研究会の形をとって皆集まった。で、集まってもらって午後になったら連盟の大会を開いて、その後一杯やって、お開きということになっていましたね。

伊藤 一番張り切っていたのは、金井秀男という男だった。(笑)

司会 まあ、地方から出てこられる先生というの、みんな錚錚たる札幌の先生方と一戦交えられるという喜びがあつて総会へ出てこられるんですよ。

伊藤 そうですね、2年ぐらいいかつたんで、高橋 まあ、内容表とか能力表と関係しましてはね、確か、2年ぐらいいかつたんで

司会 全国大会は札幌市内ばかりでなく、全道に、大きな影響を与えたということになりますね。それから、全道各市に大会が順次開催されていきますね。その地方の大会の出発点となる委員総会について。

伊藤 委員総会のあり方が、すばらしかつたんだ、あの、アカシア荘というところの。

伊藤 ぼくが研究部長だったけな。(笑)

高橋 なんとか、表にまとめあげなきゃなら

らないということ、えらい苦労したですね。けんかまでは、いかなかったけども、絶対ゆるがないというので、非常に「表づくり」に手間とりましたね。連盟の学習内容と試案がね2年目だったと思うんですが。

伊藤 何年くらいになるかなあ……。

森川 ええとね、昭和37年の時に、その気運が出てきたんですがね、これは、名寄大会です。その後で余市でやった時にね系統表の内容の系統表を発表しているんです。39年の時には、ですね、こんどは体系表を発表しています。39年の造形センターで、北九条でやったのです。この時には造形センターの川村浩章から藤沢典明から林健造・佐藤諒・大和屋敏などの先生が、みんな来たときですね、実際本になったのは、昭和41年ですかね。

伊藤 そうですね、あの33年から34年にね指導要領の改訂があつたでしょう。その指導要領の改訂がね、その前の指導要領から見ると、ばかに詳しくなっている、で詳しくなつてね、前は詳しくなくて、めんくらつただけだね、今度は詳しくすぎて、めんくらつた。何していいかわからない。こんどは読めば読むほどね、それで何とかして、これを適確にとらえる方法はないかとゆうことだね。たとえば、高橋先生はね、やっぱり自分なりの表を、それを読んで作つた。ぼくは、ぼくで作つた様に

伊藤 ああ、この気運でやつたね、第11回の滝川大会あたりからですよ。子供達の美術性を育てるというね、一つの本質論を取り上げてきた時からです。その次はね生活です。造形教育と生活の結びつきというですね。子供が生活を見つめて造形性豊かになる。こういう中でね次の仕事というものが生み出されて来た訳です。いわゆる連盟の大会そのものは、何をするものかと、何の為に大会をや

るのかと、いうことになるね、そこに、はつきり、年次的に、その積み上げ方式をとっていかねばならないうねと、そういう事で本部は、それに対して、どの様な責任を負うか、その責任の負い方がね。やつぱり、本部プランというものをね、全道的視野で、きちつと作って、それを提案して全道的な中でそれを揉んでね、もつとしっかりしたものにしていこうという様な考え方が基礎的にあった。あそこ、例えば、心象表現、適応表現、造形姿勢の三つの分野を確立した。その当時東京あたりでは、心情表現なんていう言葉を使つてね、そんな変な言葉があるかと言つてね、現在は文部省の言葉は、心象表現で統一されているでしょ。だからね、やつぱりこつちの集団討論のね強みというの、ああゆうところでは、解かると思ふのですね。あれだけの集団をもつて討議してね積み上げたものは、東京は、もつてないんだよ少数のエリートがやつてね、北海道の大きな全道大会とゆうものをね効果的に使つていったという意味でね、すごく研究というものが、筋道がたつた様な気が、ぼくは、してたよ。

司会 まあ、内容から考えてみますと、新しい、いろいろ改定されてくる指導要領に対して、いかと思うんですけどね。あの、いわゆる北海道造形教育連盟の教育内容系統の試案ですね、各領域をまずどういうふうにとらえるかということから始まつて、それから、いよいよ学習内容をすね出す訳です。造形学習の基本的な物の考え方は、室さんから始まつて、創美を経て、造形センターの考えなど、それらのものを基にして、北海道の造形教育の学習内容というものが、いかにあるべきかをその中心にしましたね。伊藤先生を始め錚錚たる人たちが、造形教育の基本的な考え方を示すことから始まつたわけですね。まず領域の考え方その見通しですね。到達度とか要求度というものが、あつたんですが、それは、もうなかなか……。いろんな立場からたとえば、創美の立場だとか、造形センターの立場だとか、それから新しい絵の会ですか、いろんな立場から議論するものですか、まとめるのに大変な思いでした。伊藤先生、伊藤恵先生からも、ずいぶん方向づけられましたね。



する、提言みたいな形で、行なわれたとゆう風に、とらえられると思います。

その中に札幌でやったのはね、あの子供の造形する為の能力というのは、どういう形であったのか、ということも調べた事がある。例えば、手には、どれくらいの握力があって、それでハサミで物を切る時どうするとかね、それから、クレヨンで塗るのと、えのぐを塗るのとではね、どっちが力があるかとかね、カンナをかける時にはね、どうゆうふうにか、どれくらいの力があるものか、とかね、そういう事を調べたね、その調べた結果をね、あの中に札幌の場合は、のせてある。それから全道の人達のね、研究を積み重ねて、あんまり厚くは、ないんだけどね、けっこうな研究物を作った。でそういうことがねやっぱりあの「創美」のああゆう事があった為にね、ぼく達は子供の表側に出て来た技能だけを考えるんじゃないかと、もともと子供が手をかけない時にどんな力があるか、ぼくらは探りあてようとした。そういう態度がね、この指導要領を見た時にね、もつと共通に理解する方法はないかというね考え方に、なった様な気がする。それがね、そういう歴史をたどっていったね、あの体系表の様なものに、いきついたと思いますね。

伊東 これらのヒントはね、あの恵さんが

作っていたね附属のプランでね、あれはね基底編、教材編、あれをぼくは見えてね、これをやらなきゃだめだと思った。

伊東 誰れも分かんなかった。(笑)

◆作用ということ

伊東 今でも分からないんだ、(笑)「作用」というのは、今でも残ってるでしよう、あれはね、恵さんがいて発見できた言葉なんだな、何度か帳面に書くんだけど、そのつど忘れる言葉なんだよな、作用なんて言葉は、どこの美術団体でもないですよ。

高橋 あれは、表現に出て来ない一つの子供の造形思考という様な事ですよ。

伊藤 あのね、ぼく達ね、子供の技術とい



うものをね、どこでかえるかというかなんだよ。でね、あんまり高い地点でおさえ過ぎるとね複雑多岐にわ

たるわけですよ。工作の技術と思ったら、切る事と付ける事というように非常に簡単に割り切ってしまうと、それと実際に作りたい物のイメージとの間にね、このイメージに近づく為には、この基礎技法をどう組み合わせいくかということなんだよね。で、どう組み合わせるかということがつまり、材料どうしの力学的なかわりみたいなことがある。そのことさ。

伊東 また分かった。その都度分かるんだけれどね。(笑)

森川 それから、紙の積み上げの研究に入る訳け。

司会 ぼくが、色彩の方を担当しましたね。では、その時の思い出などありましたら辻 辛かったですよね。一回休むと分からなくなっちゃってね。宿題だったね、あれはねやってこないと抜かされちゃうのね。それでねちゃんと分かって、次の時にね、また、すっかり分からなくなっちゃうのさ。やあ、あれは、大変だったね。

高橋 まあ、しかし、あれくらい、やっぱり先生方が考えていた事がね、だいぶ出たね。始めてだね。

伊東 あれだけ、きちんと出来たというこ

とはね、やっぱり、一つの成功だよ。

辻 金井さんのさ「ベースライン」なんて、耳にしたことのないことを言う人がいっぱいいるなと思ったね。いやいや大変なものだった、本当に欠席したら、もう分からなかったなあ。

伊東 あの頃ね幼・小・中・高とね四つの発展段階にして、そこに一貫性をもたせたということですね。今までの教材に使ってるも

司会 本当に、本部では、あの頃が、なかなか、研究で燃えた時代でした。その燃えた火が、全道の各地に広がっていったのです。

森川 ただ始めは、分からないと言う事ですね。

高橋 表にしたものですからね、全部書けなかったという事が、あるんですよ。

森川 皆は、知ってるんだけどね。

◆指導の構築のこと

伊東 まあ、この内容とゆうかね、これを、いかに授業の中に生かして行くかという所に、構築の問題があるのですよね。この構築という言葉をいいたしたのは金井君ですよ。これは札幌造形センターの大会がかわり、二

人で帰って来た、そして丸善の喫茶店で、お茶飲みながら、おい次の作戦は、なにか。積み上げ作戦は、何にする。」といったらね、ぼつと言ったの、「それは、先生、構築以外ないでしよう。」その時、ぼくは、はつとしてね。そうだ、これは授業をどうするかという問題をね、今は、その断片的な表を作って、現場が、どう生かすかという問題をね、もって行かなきゃ、これは意味ないなと思ったんだ。

伊藤 ぼくもね、そこでね問題だなと思うのはね、表そのものはね、あれだけどね。たとえばベースラインというのが出てくるで

よしよ、そういう分からない言葉が、ま、作用が出て来たし、その他色々分からない言葉が、出て来る。そうするとね、ほかの連中は

ね、分からないから質問すれば、いいんだけど、皆たいして素直でないからね、質問しないでね、そんなの大した事でないと言って、

退きに、かかるのね。そうするとね、かならず伊東先生が、ちよつと待て、と言うの、そして、もう一回考えとゆうふうにな、いつでも伊東先生がそのかしてね、それをね、言い出したやつが、後へ引けない様にしちゃう。後に引けない様な事を引けない様にしちゃう。そうすると言い出したやつは後に引け

ないから、しかたないからね、それをね、しやにむに次の日の言う事を考えて来る訳けだ。

そうゆうふうにして、あの表が出来た。だから、ますます難解である事は、まちがいない。けれどもね、やって来た人達はね、本当に真剣に、させられたんだよ。だから、そのか

す人がいて、そのかされる人がいたという事だよ。そういう関係で、あの表が出来たんだよ。でまた、指導の構築にしてもね、ある日そうやってお茶を飲んで、構築以外にない

と言った人が、いたと、そうすると、そうだなと言った、この次に、もう後に引かせないんだから、どうしても、そういうふうになる訳け。ぼくは、しかし、その為には、ずい分勉強させられた。

高橋 領域の連鎖的發展とゆう訳でね。何回、大会をもちましたかね。3回?

伊藤 函館と室蘭と苫小牧それで札幌は、その次で、完結したというようですよ。

伊東 そのたびに、ぼくはね、大会前に行ってはね、説明して来たんだけどね、やっぱり、つかめない、何か、難しさは、あったね。

辻 それで、あんまり分からないのね、先生方が実践資料を出したんだよ。実践資料を出したんだけどね、各自の所で、ばらばら

に、それぞれの理解でやるもんだからね。でもこの実践資料が、またね、大変いいものだったんだけどね、大きな資料になったのは間違いない。資料を力説するのに、大いにお互いに頑張ってきたからね、ますます難解になった。

伊藤 あれね、表を作るんでもね、作った人だってね、後で見たら分らない。正直な話ね。だからね、作って行くという過程で勉強するとうことなんですよ。それに参加した者が、それを見て、ほかの人が分かるうたって無理だ。

高橋 第3回か4回の大会に作った連中がね、玄関に、自分の資料をもつて、はりつけたんだよね。

中村 そこにね、たとえば小学校の場合はね、専門教科というのは、ない。全部やるから、共通理解という形になって、どうしてもめり込んでしまう訳ですよ。その場合、中学校や高校は、専門家だから、結局は、一回言った事が、あるんです。高橋先生がおられた時、当時かどうか私に、言った事があるんです。そこでね、結局、中学校と高校がずつと離れてくる訳ですよ。また中学校は、中学校と高校とさらに違ってくる。やつ

こんところは、ゼミにしようや、ていう訳でね。あれも、しかし、なかなか、おもしろかったんじやなかったのかなあと思うね、泊りがけでね。

辻 金井さんによって、青森から、たくさん講師を呼んでもらったんだよね。一回でおわったね。それも絶対大会をやるべきだとうことだね、大会を継続しようという事で、常広へもって行ったんです。

伊藤 やあ、あの頃さ、もう大会を毎年やる訳けに、いかなからね、二年に、一回にするとか、三年に一回にするとか、その研究のなくなった地点でやろうとか、いろんなつらい話が出た。実際ぼくは、なぜ、そうなるのか、ぜんぜん分かんなかったけど。

高橋 結局、内容充実のね、もり上ったときだけに、財政ということが、あつてね、こどもで財政を立て直さないとね、連盟が生きていけないう事情があつたね。

坂田 その頃でしたか、あのう、一回会を解散して、あらためて連盟をといることがありましたね。

高橋 そういう案が出ましたね。

坂田 伊東さんが、なんか話して、おられた。

ばりね、なかなか、難しい所だね。

伊東 よく読んでいた人も多いことも事実だよ、こいう物つてゆうのは、色々受けとりは、さまざまということだよ。

辻 坂田さんにも、一度言われた事があるんだよね。小学校の時間みたいに長くて、くどくて、どうしようもないと、でも、それは、しかたがないの事情が違うから。

高橋 主体が、小学校を中心にして進んでいるんでないかって。

辻 考えてみたら、それをやつたから浸透したんだらうとゆう感じがね。あれこそ、やらなかつたらね、すく、それこそ専科でないからね、ますます分らないんでね、あやう事があつて小学校の場合はね、まあ、小・中学校と違う事情があつたから、さうゆうことが、あつたと思います。

坂田 やあ今ね、「構築」という言葉をね、たいた前に使っていますね、たいしたものだと思います。それはね、今の段階で、まだ教育委員会なんかは、構築は、一般化してないと思つて使われてませんからね。あの、でも一時使いましたけど、引つこめたですね。でも今は、もう困る様な言葉で、ないですよ。だけど、その次元では、その言葉で、皆まず、大変

伊東 あれは、連盟の形体上、札幌支部というものを、もつていなかった。常に連盟本部と個人のつながり。

坂田 そうゆうことだけだったんですか。

伊東 研究活動の基本というのは、やつぱり札幌に支部があつて、そこから代表が、本部に出て、地方は、皆さうゆう形態をとっているのですね。

坂田 なんだか、一回連盟がつぶれたのかなあと、何か、そんな感じだった。

司会 その頃、坂田先生、札幌の中学校の方で、ですね、色々テーマをもつて研究なされたですね。

坂田 あの、2・2・2の問題から始まつて、美術科というものをね、本当にしっかりと、教科に、認められて行かなければならぬという意識が、高まつてね。そのためには、自分達自身が、教科というものを、どうゆうふうにして、とらえているか、という問題がね、教科の確立なんてゆうことをいって研究が始まつた時だよ。

司会 あの、高めた能力との中味をお話ください。

な事だと思つたんでないだろうか。

高橋 新しい指導要領も表現と観賞と大きくなったでしょう。あれは、また構築に、考え方の上に立っているんでね。

伊東 ただ、美術教育の場合は、幼稚園であらうと高校であらうとね、一つの考え方というのには、一貫できるんだよね。さう、くつてないんだよ。ただ、その程度が違うだけであつて、

司会 まあ構築表、三集出しましたね。そこまでは、連盟の研究充実期であつた、しかしながら、社会的な問題など、あつて、ですね、連盟も財政的な危機に落ちいったと、というのが、いわゆる、30年代といつていいんじゃないかとでしょうかね。ご苦労話でもひとつ。

◆札幌ゼミナール・財政危機が

伊東 ぼくが一年やつた間にね、円山神社が、ゼミをしましたね。あれは、一種の経済的なね、問題が、一つあつたという事と、もう一つは、新しい絵の会だとかね、全道的に美術会が、やや混乱していたという時期、大きな大会をもつのに、いつもぶつかつていたんだ。ぶつかつて、やりづらくて、しょうがなかつた時期なんですよ。それで、まあ、こ

坂田 やあね、高めた力という言葉が、出て来たのは、ずっと後からで、始めは、まあ、テーマだけは、大きいんだよね。「色と形の認識と創造」とかね、「教科性の確立をめざして」という副題が付いている様に、すごいんだよね。先ほどの話じゃないんだけど、何を言ってるんだか、さっぱり分からない提案から始まる訳ね。やあ、三年ぐらい、すつたもんだ、すつたもんだしてね、実践に入つたんです。各学校ではどんなふうにして、題材を指導しているのか、どんな力を高めようとしているのかといった授業を全部分析して、それこそ、あれは、全員でやりましたよね。大変な分析でしたけど、さういう事を、やつているうちに、いくつもの各領域の分野の授業についてね、まあ、さまざまな、自分の言葉で、現わしたものが、いっぱい出てくる訳ですよ。さういうものを教育理論など、いろんな事から整理したり、又自分達の現場の発想を出来るだけ大事にするようにして整理していくと、さういう中で、最終的に、自分達が現場だからね。自分達が、なんとか、さういう力を子供達に、つける事によって、美術科の学力というものを発展させて、いきたく、毎日の授業で、それを高めていきたく

◆色と形の認識

いと、そんな気持が、高めた力という言葉になったんですね。だから実際には、実践的能力あるいは、態度的能力というふうに言った方が、いいかも知れませんね。

司 会 財政危機をのりこえて、気運が盛り上がったのは第三十回の大会（全国大会）を開催することになりましたね。立て役者の先生からどうぞ。



あの、ゼミの後ですね。帯広大会、本場に一銭もなかったんです。非常に苦境でした。それで、その時にね、その当時の本部常任委員というのはね、全部

で26名でした。高橋委員長に、ご相談いたしまして、まず、人脈・金脈というけれど、とにかく、まず人間の心の和が大事でね、とにかく研究する同志を集めなきゃだめなんだというこでね、その頃常任委員を70名くらいに増やしたんです。そうすると、ひとつの会議でも、その夕食代だけでも大変な事で、その上に会費というのがなかなか集まらない、辛い熱心な先生方がいらつしやったので、まあ手弁当で集まってきたと、活動したのですね。それでも、かけないようになつて年間20

ン会場が一つという事ですから、大変な事です。子どもを輸送するのに80万円かかりましたから、それは、とんでもない大きな大会だったんです。授業実践を伴った、全国大会でして、名実共に、全国大会でした。これも構築をずっとやって来た、実践を裏づけがあった為ですね、そうゆう事が又、基盤になつて実践が、すばらしかったとありますから大会後、いい結果を生みまして、又、全道が燃えたんです。現在又、20年前に溯りまして、熱心な研究が現在、続けられています。本日に日曜朝早くから夜遅くまで、討論に討論を重ねて、二年かかりで、現在色々なものを検討しているのです。これについて、三十年を記念してですね、指導構築の第四章を出すところまでできました。現在でも美術展の審査をやつて、おりますが常任委員が50名くらい来て仕事をしています。そのほかの事業の立体造形展も、始まってから今年で、四回を数えます。このように実践の仕事も全道的に広がりましたね、いわゆる理論研究と共に実践の間接表の作品展もあつて、子供達を育てる、大きな力になっていることです。まあ、とにかく、高橋委員長を始めとして、財政立て直し、人間の心構えの立て直しといいま

万、30万かかるので、ボーナスもらう時には、うちの家内から、利子をつけないで、借りて来て、そして何か集まりますと種市さんがあの集まった頃にね、家内に、どうもすみませんでした、と言つてね返して来てくれた、というのが二年間続いた訳ですよ。そういう、各委員会が集りでもね、次の大会をやる気持が、然々なかったんです。各地区が、財政困難だったんです。そして又、集まりにくい条件が、あつたんですね。それで、こちらの方から2年、3年先を見越して、委員の友達に声をかけました。いわゆる、お願いをしたのですね、まあとにかく大会を広げようということですよ。そのうち各地区でも、やつぱ

◆全国研への気運

りこれは、連盟をつぶしてならんと、我々は連盟の研究に支えられて地方をやつて来たんだし、我々も又、助けていかなくちやならないと、そんな気運が高まって48年頃ですが、そろそろ全国大会をやろうと、ムードが盛り上がり上がつていったんですよ。その時ですね、野村先生は、野村先生で、東京本部のお知り合いの方から、ぜひ、北海道に大会をもつてと、いわれるし、又、大和屋先生とか、北

すか、人間お互いの総協力といいますが、そういうものが、六ヶで実を結びました。前途洋々たる連盟が、現在出来上がった、ばく進中である、そうゆう様な感じで、大変うれしく思っているんです。

司 会 かけあしで30年のお話をしていただきました。さて、連盟40年代に向かつて、もう一度大きく飛躍しなきゃならないという時期に来てと思うのですが、これからの連盟はこうあるべきじゃないかという事を簡単にコメントしていただきたいと思ひます。

◆造形教育の重み

伊 東 まあ、あんまり、いい言葉も浮かばないんですけど、私は今、現場を退いて考えて見て、教育の分野の中で、造形教育というもの、どういう重みをもっているのかと考えてみますとね、やっぱり教育の実用的な物という角度からではなくて、人間の拡張というか、人間を形成していくという中で、単的に、それに結びついていく教科としての造形教育というものがやっぱり教育全体の中で見直されるべきだという一つの確信みたいな物を、ぼくは最近感じている訳ですね。ともすると現場では、それは、昔ほどではないと

海道出身の方が高橋先生を通してぜひ北海道でやってくれといわれ、又若い方では、佐藤さんですか、ああゆう方が、やつてくれという事がありましたけども、二・三年辞退していたんですね。50年の暮れにですね、世界児童画展の審査に行った時に、ちょうど、委員長と頼んだんだけど、どうなんだろうといわれたのです。その時、常任委員90名になり、事業をおこしていました。すでに教育美術展も始まつておる、という状態で活動が活発になって来き、研究も盛んになって来たし、全道大会も、二年先、三年先までの開催の予定がたつたものだから、引き受けてもそろそろ、よろしいぞという皆さんの意向でお引受けして来たんです。大会は、一千万を上回る、お金が、地方を訳けですから、大変な事だったんですけど、札幌は、もちろんのこと、全道的各地区とも研究が、盛んになつていて、とにかく北海道でなければ、だめだぞという気運で、ございましたと思つております。そんなことがありましたので、思ひきつて、今回の事業など、これをやつた訳でございます。私はおそらく、授業の場所がですね保育所が二つ、幼稚園が三つ、小学校が二つ、高校が一つ、というそして、メイ

思います、教育の片隅にあるという様なね解釈をしただけで、それは間違えだという事ね、内部に持つていかなきゃならないし、時代が、そういう単なる実学的な物だけじゃなくて、もつと人間の一歩高貴なね、いわゆる創造性とか、あるいは、イマジネーションの世界というものが、人作りの中で、非常に重要な役目をもつてきた時代の中に入つて来ているんじゃないか、という様な意味で、お互いに造形教育とは、なんなのかと、どれだけの、いい栄養をその中から与えている、又は、いかなければいけないかという事をやつて側で確信を持たなければだめなんではないかということですね。

高 橋 造形連盟が果たして来た、第2次の造形教育の改訂というね、ことを今やろうとしていく訳ですが、何か今の成長していく子供の面から考えた場合ね。もつと、この内面的な人間形成と言うかね、そういう面が、造形教育が、しめる主目的だということを、やっぱり思う訳ですよ。そういう点から、いきますと、いわゆる技術主義的なね、その造形教育活動というものが重要だね。一つの間活動のね、根源をね培かつて行くものではないかと、思います。そういう視点でね、や

つまり、これからの80年代の造形教育は、ますます内の方に入っていくというのかな、そういう質的なその面の目標を明確に、持つて、くぼかにないと、こう思いますね。

◆連盟の役割



坂田 今、お二人のお話を聞いて共鳴しますけれどね、組織体という立場に立つて、この連盟が、どんな役割をしているかという具体的な面ですね、具体的

的な面から言いますと、80年代はね。現場の意欲を培って行く支えになる様な、エネルギー源といえますかね、そういった物になる様な働きを、ますます、して行かなくては、ならないだろうと、思ってますね。そういう中で、あの組織体を、この指導の構築の様なものはね、非常に全道の個々の先生方の掘りどころになっていると思うんですよ。そういう内容が、たとえば作られると言ってもですね、主体は、やっぱり札幌だけみたいな内容を

もって広げて行くかという様な問題もあると思うんですよ。で、まあ地方なんかの場合であつたら、小・中・一緒になって研究会をやつて、様な事が多いそうなんですけどね。やっぱり別れた、分化した研究も行なわれるという様な事も大事だと思うんですよ。なにか、前に高橋先生から、連盟という名前前は、色々な団体をね、こう吸収しながら幅広く取り入れてやってゆく会だ、とゆうことだと聞きまして、ただね。北海道には、残念ながら、色々ありませんけどね、とにかく造形連盟一色みたいなものですよ。それだけに責任は、大きいんですよ。で、具体的な、組織運営あるいは、内容を見直して行かなきゃいけないと思います。そうすれば、もつといい、もつと働ける連盟になるんじゃないかと思つてますけどね。それから、とにかく、この連盟が、ぼくが、具体的な面で参加したのは、まあ最近ですからね、分らないですけど、あの全国大会をやつた後でも、すぐに又今年から、道内で研究会が続けられる訳でしょう。まあ、このように研究を断続している力は、大変なものです。そういうものは、皆で大事にしていくべきだとそんな気持ちでいますね。

中村 今、皆さん言われた、結果がですね



高校に来ますと、技術の中で、音楽、書道、美術、工芸と生徒が、技術を選んでいますね。その場合に、生徒が何を技術として学ぶかという時に、当時金がかかるといふ事で、どちらかと言うて敬遠されて、今は、金がかかっても、けして選択は、減らないようになってきましたね。伊東先生が、言いました様にね、人間形成に、もつと、くい込んでいく必要があるんじゃないかと、こう思うんですよ。それも、一人では考えるんですよ。高校の場合は、どちらかと言うと、都市が割合、陥没している訳ですけどね、坂田先生は、都市の方が、割合、都市中心型の構築を考えているということなんです、高校の場合は、地方が割合、積極的がある訳なんです。で都会が、だめなんですよ。これ、やっぱり、どこが悪いのかと私が思うんですけどね、組織が、まとまらないというのは、そういう点なんです。札幌市内、それから行政と、うまくいってなると、ぼくは思うんですよ。地方から札幌に来てしまうと何もなしなよと、地方に居ると来たい為めに何かしなきゃならないと、ゆ

う様な、そういう事で、うまくない時がある訳なんです。もうひとつ一匹狼というのも、少なからず、ある訳ですよ。おれは、一人でやってみせるぞと、ゆうようなことね。それでは、やっぱりいけないのでは、なんとかまとめていって、訳ですが、それで連盟というのは、坂田先生が、言いました様に、そこを、大きくまとめて、連盟の結局、最高責任者は、小学校にも中学校にも、高文にも関係なくそこに大きな目玉があつて、そして、さらに別れた状態で組織体があると、もう少し発言権もあるし、力強さが出て来るんじゃないかと、それからもつと強く成長していくなという感じをもちます。そうすれば行政の中に、さきり込めぬしね。我々も出来るだけ、そうなるために、協力していきたい。我々をまあ、見守ってもらいたいなあと、思っていますよ。

司会 もう連盟の発足と共に30年を歩いておいでになった、伊藤先生から一つ。

◆技術の再認識

伊藤 あのね、ぼくはね、将来に向かつてこういうふうにしたらいんでないかと、こういう事が考えつかないのね。今ね一番問題だ

なあ、と思つてゐる事はね、あの連盟が、充足した当時の子供と、今の子供とはね、まるつきり違つて事だ。造形的な面から見ても、今の子供はね、物を作る様な状況のもとに置かれていないって言う事だ。学校ではね、さうゆう物を作る。また、子供たちの教育上のこと、そして今の色々々場面の設計やら、あるんだけどね。これしかないってゆう事なんだよ。昔はね、近所の子供達の中で、学校で教えない事もけつこう教えてたのね。たとえば虫かごの作り方なんてね、ちゃんと近所ではね、ちゃんと伝えられた。弓の作り方とかね、たこの作り方とかね、そういうものは、ちゃんとガキ大将みたいな者がいてね、それが作れないと仲間に入れられなかったといつてね、実に実用的な意味を持っていたねこれが、非常に造形的なものを果たしていたと思うの。その力を、少し学校が、借りればね、何とか、なつていたのね。ところがね、これからはそうでない、その力というのは、全くない子供に、子供にないんじゃないかと、その外格の筋肉と力というのは、いくら育だつていくんだけどね、そういう場面を経ない子供供つてね、はたして造形的な思考が出来るのか、どうかという事にね。ぼくは大

きな問題にねぶつたつてゐる。だからね、この造形能力の態形表でもね、なんでもね、もう一回ね、もつと基本からね、洗い直す必要が、どうしてもあるんじゃないかと思う。学校で組み立てるには、どうしたらいいか、ねこれはね、さつき、心象の問題も出てたしね、非常に重要な教科だという話も出てただけだね、ぼくは、重要だという事も考えるし、心象も大事だと思ふんだけどね。とにかく技術も、全然ないんだね。そういうものを通して、心象の表現がね、出来るとも思われたい。そういう意味でね、ずいぶん子供にとつて不幸な時代だなあ、もつと別な言い方をするとね、あの道路を車が走る為めには、子供にもたらした不幸というのはね、すごく大きいんだよね。で、それもね、いつべんに道路を車が走る時代になったら皆を驚かしてね、止めたと思うのね、ところがね、車の増え方が徐々だったの。とつても徐々だったの。20年かかつて増えて来た。だからね、今になつてからね、気付いたつて、もう遅いのね、後戻りなんか、全然出来ない。そういう中で子供が生活している。そういう事が、ぼく、ひどい問題がね、今出ているんだなあ、と、そこだけね、訳しあげたいなあと思ふんですよ。

司 会 ありがとうございます。ええと、最後に、初代委員長さんに展覧を、

◆教育全体への発展を

野 村 非常に、これは難しい問題だと思ふ。現在のほうが最初に作った連盟の時代と現在の世界状況、日本国全体の状況から考えても、口では、人間形成というものを唱えているけれど、これが本当に人間形成に造形教育が、結びついているかという、まだまだ距離が、長い様な気がします。やっぱり、もっと大きな目で、やっぱり造形教育は単に絵を描いたり、物を作るだけでは、なしに、もっと、くいこんだ、情操教育が、教科全般に、もっと広く行かないと、これからの子供が大人になって、どんな大人になるか、非常に心配でたまらない。今、それを非常に考えて、連盟のこれからの発展というものはそういう所を目をつけて、広く、学校全部に造形教育の精神が、全部の指導者、先生に及ぼすぐらいの、校長をはじめ、全部が、そういう事をしないと、日本の国というのは、どうなっていくかということが、非常に、憂慮に耐えない気がする。そういう方面で、今第一回の連盟を作った当時から30年たって、今

また連盟が盛り返して行っているという事は、非常によろこばしいことです。これから、人間形成のもっと積極的によれて、いってほしいものです。

司 会 どうもありがとうございます。では皆さんのご意見を受けながら、現委員長から、

◆心をつくるということ

辻 野村先生から、大変痛い事をいわれました。私は、造形教育は、結局、子供の心を作る事だと、単的に考えている訳です。で私が、事務局長を6年間やらしていたいて現在、力がないままに委員長をやらしていただいている訳ですけど、一貫して考えて来た事はですね、そういう心を作らなければならぬ私達ですから、まず教師みずからがね心を作る事に努力しなければ、ならないという事です。自分の心を作るには、相手にも自分の心を理解して、もらわなきゃならないし、相手の心も理解する様、努力していかなくちゃならない。そして私達が、そういう同じ心を持つ、私達の造形での仲間、教育現場の仲間が、ですね。子供達の目を開くために、心を作るために、まず、私達の心を開き合つて、お互いの人間の和で、つながり合わない

れば、すばらしい共同研究というものは出来上がっていかないしせっかく実践された、色々なものも残がついていかないと、ましてや全連に浸透して行かないという事です。それでこれからも、ますます、人間の心を育てる事が今日の教育の問題で、美術教育が、一番大事な事だと、そう思うんです。もちろん美術教育だけじゃありません。でもやっぱり、

その核にならなければ、ならないという様な考え方を持っております。幸い道内各地区でも、お互い非常に和気あいあいとして、しかも、激しい論議を戦わし合いながら来ている様でございます。さつき坂田先生、中村先生のお話がありましたけれど、本部だけの研究では困るので、あるいは、そういう事が必要ではないなんていう様な声がない訳では、なかったんですけれども、近頃の本部の常任委員は、そういう事でなしに、自分たちの勉強にもなると同時に全道に奉仕しなければならぬといった気持ちでたくさん持つてやられているのです。それから各地区から言いますという、もっとも本部と支部との交流をもっともっと緊密にしてくれという事で、この数年間そういう様な非常に緊密な連絡をとりな

がら、研究が進められているのです。先ほどから、お話があり、系統表もですね、いちおう試案が出され、その試案が、さらに改訂されます。先ほど伊藤さんと先生からお話で、ございましたけど、子供の生活環境や時代背景も変わっております。そういう事で、子供の生活をすっかり洗い直して子供の心が何処にあるか、どういう生活をしているのかという事を原点から見つめ直して多少の危険性がない訳では、ありませんが、もっとも私達の訴えを卒直に全道に広がらせようと思っております。30周年記念に、今まで先輩が、ずつと築いていただいた、しかも全道で、ずつと貴重な拠り所として、学習内容表、能力表その他と一緒にですね、今回出しまして全道に訴えたいと思います。したがって、これが浸透する為めには全道からの、ご意見をいただくのにまた、2、3年色々論議を呼ぶかもしれないですね。全国大会で金井先生が、みすみずしくて、しなやかなということを出されました。確かにこれはまえの構案と同じ様にいろんな問題が、ありましたが、現在、全道、

全国、それから、他教科の出版物を読みますと、不思議な事に、みすみずしいという言葉が、随所出ているんですね。それに、加わえ

てしなやかな子供とかがいやに出てきてるんですね。これは、ひよつとすると指導の構築と同じ様にこれが普通の造形用語あるいは、教育用語の中に、使われる言葉になって来てるなと考えるものです。北海道には先輩をはじめ後輩のすばらしい方々が、たくさん、いらつしやうて、そういう方々が、お互いに、力を合わせながら歩んで来たんだと、この連盟はとにかく子供のためですね、ますます盛んにする事が、北海道の子供をすばらしい方向に伸ばしていくことだと考えます。三十周年を新たな、決意の時点にいたしましたので、ですね、全道に向けて、頑張りたいなあと、その様に考えております。

司 会 大変どうも長い間座談会をこれで閉じさせていただきますと思いますが、一応まとめるといふことは、いたしませんので、この座談会を、お読みになった先生方が一人一人が、色々な形で自分の中身で、まとめていただこうと思います。これからの連盟のますますの発展を祈つてこの座談会を閉じます。みなさまありがとうございます。

委員長



伊藤 恵

(札幌・東山小)

三代目の委員長だった赤石武士さんが亡くなった。つい先だったことだ。70歳の交通事故、しかも単車に乗ってのスケッチ帰りだという。

単車、歴代委員長で、単車にのるのは赤石さんだけ。それにスケッチとなれば、いかにも赤石さんらしい最後ということになるか？だが、だれも「あの用心深い人がね」と驚く。

赤石さんは緻密で物知りで、何といっても生真面目な人であった。スキー指導員で、囲碁何段であり、北海道の昔のことなら全部知っていて、秋の昔を夏までつけておいて食べるとも聞いていた。

道展会員で、オレンジとコバルトブルーをしぶくした秋色の絵が美しい。

生真面目さと決断とが生活のどこにも浸透していて、同じ学校の〇〇氏が「先生、毒き

のこって案外おいしいですね」というのを聞くより早く「一大事だ。家中全部ですぐヒマシ油を飲んで、病院へ行け、今すぐ」と。明快適切な処置のおかげで〇〇氏は今も元気である。

東京の教科書編集に同行したひとり、一夜行方不明となった。交番に電話し「近所で喧嘩出入りはなかったか？怪我人はいないか」その足どりを予想して先々へ連絡するなど、わが事のように心配するのであった。

そんなこんなを思うにつけ、人々という、「70歳だもの、何か絵の構想などをしてい

たんだろね。ひとのことはかり心配して

……」
とし、この姿なき殺人者め、にくい。
二代目の委員長新妻清さんもすでない。
新妻さんは野村英夫初代委員長の名事務局

長であった期間の方が、委員長であったときよりもずっと長かった。野村さんのパートナーとして新妻さんほど適任の人はいなかった。別のいい方をすると、二人は一人であった。連盟が図工の学習書を発行する。連盟が教科書の道版編集に当たる。連盟が全国大会を札幌に開く。そのような多忙の時期を、ほんとうにうまくまとめあげ、連盟の基礎を磐石につくり上げた。

新妻さんは多忙の中で芸人でもあった。短く折った割箸を鼻につっこんで嘔吐と、ひどく鼻の下が長くなる。ベレー帽をさかきにかぶる。背広の上衣を裏返しに着る。手に長柄の箒を逆にもつ。そうして「オーリヨッコ節」にあわせて、つつつつと畳の上をすりり足で動く。箒を舟の櫓にみ立てて近くから遠くへ押しやるしぐさがいかにその節のかなしさに合って「雪や氷にとざされる」くだ

りになると、みんな涙を流して笑いこける。なぜか、わたしの新妻さんは、いつもそのかつこうで目の中にあられる。

あとで述べる委員長とともに事務局長がそうだから、たまの呑む会は、いつも和気あいあいであった。

連盟10年誌も、事務局長であった新妻さんが「連盟の十年」と題して詳細な記録を残している。その処々に「みんなしっかり頑張った」と書いた。

事務局長だから、いつも凡張面で、仕事かと思うように進まないようなことがあると、若いわたし達を「これでは困る。君ばかりすまないな」と指導した。

研究はこのほかきびしく、実践や研究というものの大切さをいつも力説した。そういう点でも図工ばたけには数すくない理論派であった。

短い新妻さんの委員長時代は、事務局長の赤石さんに一任した形で、あまり表面には出なかった。自分の引いた路線に対する自信であつたかと思う。

現職を去った先生は、つまり委員長をやめられた先生は、あまり幸せではなかった。道展会員であった先生は、道展の展示のた

め、若い者といっしょに高い台の上で仕事をした。そうして誤って台から落ちる。それから体がいつも思うにまかせないようであった。高い台からどのように落ちたか知らないが足を踏みはずしたもののしおのせいで、回復が遅いものとしのせいにちがいない。

老いるとは、そのようなことであった。オイルシヨック。オイルシヨック。わたしはオイルシヨックであった。

先生が亡くなったのは昭和50年。69歳であった。

それからみると、初代野村委員長はまことに元気である。

小粋な背広の内ポケットから出した櫛で、まだあまり白くはない髪をなでつけて「やあみなさん」というほどに元気である。

毎年のように個展を開く。道展会員野村英夫の貫録を示すというよりは、絵とともにある先生の生きがいであろう。

もちろん連盟の顧問として、道大会には欠かさず顔を出す。これもなかなかできないことだ。

奥様が亡くなられてから、息子さんの旭川転勤と、先生は永く住みなれた家をはなれて

旭川へ越された。これはさすがの先生にもずい分シヨックであつたらしいが、最近再び札幌に戻られたときは若い奥様を伴っていた。十余年に及ぶ委員長と、教頭であり校長であり、加えて「生きる」としやれた胃の手術であり、前の奥様は口ではいえないご苦労をされた。先生にとつて前の奥様はなくてはならない人であった。先生は前の奥様のありがたさがよくよく身にしみえて、かえって奥様のいない生活が余程淋しかったのであろう。

「図工を教えるときは、最初にバツと万国旗など出して見せるんだ。そうさ手品さ。手品で喜んだら、子どもはだまっていでもいい絵をかくよ」

先生は自分の若いころの授業を、よくそのように話した。

でも、その話だけから授業を組み立てるわけにはいかなくて、わたし達はああでもないこうでもない迷った。迷って研究の糸口へたどりつくために努力をしたものであった。つまり、事務局長の新妻さんとはちがった型の指導者であった。一見がたつてみえる二人によつて、かえって連盟は生き生きと運営されたといえる。

そのころ、「図工などやっていては、教頭や校長にはなれない」などという声があった。実際、考えてみると戦前戦後を通じて、図工ばたけの校長などはいなかったようである。それでも野村さんは教頭になり、校長になった。連盟はその昇進を大いに祝った。図工ばたけの校長第一号のために大いに祝った。よしあしはともかく図工に校長がつぎつぎとまわれるのは、それからあとである。

第9回の全国大会が札幌で行なわれることになったとき、野村さんは教頭であった。全国大会ともなれば、肩書きが教頭ではということであつての札幌市教育部長で当時陸軍中学校長であつた、本来国語ばたけの佐藤麟太郎さんに準備委員長をおねがいすることになる。

佐藤先生は準備会のたび、殆んど出席してメモをとり、進行上の助言、だめおしし準備の進行を見守られたばかりか、三日間にわたる大会中、全国の図工研究者を相手に大会委員長としての役をもののみごとに果たした。わたし達若い者は、佐藤先生の並々ならぬ手腕と勉強ぶりにただ驚歎した。

それにしても、野村先生のおねがいが、連絡など、かげのお力、人柄がそうさせたのでは

ないかと、当時を知る人達は思うのである。

野村先生は、十年誌の中で語っている

「私は当時教頭という立場で、ふだんの職務でさえ多忙なからであつたので、この大事業を完遂することの困苦は火を見るよりあきらかであつた。私はこのため数日苦悩したが、千葉校長（当時札幌・円山小）の深い理解と校内の先生たちの激励もあつて、私自身としては一生一代の仕事として生命をとしてやりぬこうと悲壮な決意を固めたのである……」

野村先生は人も知る芸達者、中でも百面相は出色である。

たとえば「大雪山の狐」というのがある。口をとがらせて、頬を内側から吸う。とがった顔をつくる。手を引き猫のようにする。

髪を後ろへぴんとかき上げる。片足とびに三度跳ねて、キョロツ、キョロツと目頭を動かす。ただそれだけのことで、人間野村英夫は大雪山の狐になつてしまう。

舌切り雀だの、丸井さんの鬼だの、尾上松之助だのノートルダムにせむし男だのが済んで、横にたおした唐紙のかけから、ドドドドと「お岩」が出ると満座は一様に固唾を呑む。女性などは、たのまなくても悲鳴をあげて、

本気で逃げ腰になる。爆笑と感嘆と拍手の渦になる。

大いのはそれで乾杯である。

ちかごろ、百面相の外題進行の者がめつきり減つたこともあるが、本人は、「あまりへんな格好をすると背骨にさわるんだ」としたがらない。

元氣そうにしているが70歳をこえと、やはりとしが気になるようだ。

初代委員長の野村先生の前に、初代以前の二人の会長がいた。

フィルムのSのようにスタートの会長は、実は師範学校で長らく図画を教えていた藤野高常先生であつた。

昭和24年4月、小中高大の同志35名が札幌美術連盟を組織した。会長に藤野先生の名があつたとき、みんな一も二もなく大歓迎であつた。

学制改革で師範学校は学芸大学に昇格した。昇格といつても教員養成を目ざす以上、大してかわりはないだろう。すくなくともわたし達にまで影響はないだろうと思つていたのであつた。教授としての条件が面倒で、結局は絵画の教授を新しく迎えることになつ

たからである。

しかし、それは大学部内の事情で、美術連盟にはかかわりがない筈であつた。会員が尊敬する藤野先生が会長であつて差支えのあるわけがないと、誰もが思つていた。

本州の新制大学あたりから突然教授として赴任したのは、会員の誰も知らない人であつた。誰が知らなくても、それから追い追いつ本道の事情がわかつて、会員との交流も深まれば、そのうちに必ず「先生、是非会長をお願いします」となつた筈であつた。

「わたしを会長にせよ」主任教授は、会に顔を出すですぐさういつた。

北海道へ来たら「一生懸命にやろう」と思つたのかも知れないが、あまりに唐突であつた。

もともと小中学校の図工関係者というのは描いたり作つたりすることの好きな連中で、どちらかという会長などは誰かほかの人にまかせておきたい人であつた。つまり会長は大学の先生におねがいで、自分達は実践と研究を深めたいのであつた。

だが、本人からそういわれると話は別であつた。「それは会員がきめるものだ」という本筋が反発となつて頭をもたげた。

である。

だが教授になるのには、外に発表した学術論文または公募展作品が何点か要求されるのだそうであつた。実践家としての先生にはそれがなかつたように聞いた。

一途に師範学校教官であつた先生のあり様が、新制大学教授にあわなかつたわけであり、その条件さえ合えば、どうあつかましくてもいいというのはどういふものである。

余計なことだが教員養成大学にとつて大いに悲しむべきことであつた。

連盟が、そういうものと早期に縁を切つたのは賢明であつた。

だが、そのことは、藤野先生の岩見沢分校への転出という結果を間接的にまねいたように残念である。

藤野先生はいま80歳をこえてなお鑿鑿。水墨画を楽しんでいる。

第4代の委員長は和田芳郎さんである。

昭和24年、第二回全国大会京都大会に道代表として参加。研究発表もした。「学校を一九とした図工教育の推進」というような内容と記憶するが、少壮図工人の心意気が溢れている。

そのとき一緒にあったわたしに「北海道でも全国大会をする日が来るね」と何度もいつていた。また、同宿の東京勢が「北海道の先生へ書をあげよう」ともって来たのが何と、更紙三枚の謄写印刷であったことについて「北海道をばかにしたんだ。こんなことをすると、自分がばかにされるのも知らないでね」と話していた。

和田さんは札幌規模の酒豪で、いつもなおに酒のとりこになった。

酒を呑んで酔れるのははずかしいことと、心配しながら呑んでは酒に対して申しわけないことだ。酒と人とは相身互いだ。ときに人は酒を呑み、またいつか酒が人を呑む。そういう意味ですなおに酒のとりこになれる和田さんが羨しい。後輩はみなそう思った。

和田さんが委員長になって、第19回全道大会が札幌中央小学校で行なわれた。各校から児童と授業をもちよったのである。そうして例の指導の構築にビリオドを打つことになった。

研究テーマと授業とが、これ程びつたりした研究会もはじめてだが、研究物「指導の構築」も、連盟本部常任委員と地区研究家との原稿をあつめて二百頁に及んだ。三年つづき

事務局長時代に開花する。そうして、先生が委員長になると「新しい主題」への取組みとなるのだが、皮肉にも連盟は厳しい資金難に見舞われるのであった。

もともと研究ばかり好きな連中の集まりだから、そういうことは得意ではなくて、いくら話してもいい方法はなかった。

最近、伊東さんは奥様と二人でヨーロッパ旅行をした。パリ郊外にアパートを借りて、そこを根城にアテネ、ローマ、マドリッドなど各地を心ゆくまで見たという。

「先生、ずいぶん絵をかいだでしょうね」「いや絵をかきに行つたんじゃないよ。いろいろ見ただけさ」

伊東さんには、そういう「ゆとり」があるその伊東さんがいろいろ見たことを、ゆつくり一度ききたいものだ。

第六代の高橋栄吉委員長は初代の次に永い。六代目は、事務局長辻悦平さんとともに、連盟を運営資金難から立ちならせることに成功する。

最後の年として本部は、本部提案のこの主題の実証をしたのであった。

和田さんも、おとしである。しかしほっそりとした体で大へん元氣である。そうして何がふしぎとて、これ程様子がわりした人もないものだ。というのはこの七年間一滴の酒も口にしないばかりか札幌断酒会相談役なのである。

研究そのものを、最もストレートに推進したのは、第五代伊東得夫委員長であったといつていいだろう。

連盟がつくった「造形能力体系表」や「小中学習内容の系統表」は、伊東さんが研究部長時代に部の総力をあげてつくったものであった。

伊東さんの進め方は、具体的に「表をつくらう」などとはいわないで、何となくはなしに表をつくらざるを得ない状況と雰囲気をつくつてあとは有無をいわせず……実際、部員は自分からいい出したわけだから、も早あとへはひけなくて、とても有無をいうわけにはいかない。そんな進め方であった。

表づくりのために、委員は連日のように集まって夜の八時九時まで議論した。

大判の模造紙がはり出され、いつの間にか表が係がきまってマジックを握つていて、黒の上を赤がかき、赤の上で青がかいた。だれかが異説を唱える。みんなが乗り気ではなくて異説がひつこもうとする。伊東さんはそんな時に限つて膝をのり出す。

「さて、そういうとらえ方があるぞ。」というわけで、異説は引くに引けなくなる。本気で考える。最初はたしかに異説なのが、話すうちに変化して重要な価値をもつたりする。

不思議なことだ。表はそうにしてできた。

連盟がそれを発表すると、地方の先生方は大いにわがながつた。つくった連中も、ときたま頭をひねつた。(その時どうだったか)

「表」はつくられる過程で欄の欠落を許さない。それだけに関係者は大いに勉強になった。だが、勉強が深ければ深い程、仲間以外には難解になるものらしい。

それが、つぎの高橋研究部長へ引きつがれ「指導の構築」によって、表の具体化をはかることになる。伊東さんの事務局長時代であった。

「表」は「指導」へつながって、伊東さんの

「あんたもそう思うか? いいんだな、それでいいな。わかった。うん。そうか、そうなんだな」

栄吉さんが話し込むと、最後のところをそのように念を押す。だから、そこで誰でも二者択一をせまられる。

二者択一、実際の仕事を進めるには二者択一こそ重要である。途中でほかは仕事にならない。

教育の研究とはそこであらう。

連盟は「全道教育美術展」の開催にふみ切つた。連盟は「立体造形展」の開催にふみ切つた。そうして連盟は、第30回全国造形教育研究大会を成功させる。なんと一千万円の大予算であった。

「教育美術展」は、かつての「子ども道展」を結局は肩代りすることになるし、「立体造形展」は全国的に例を見ない大規模と良心的のものとした。もちろん会費だけではできなくて資金的にはメーカーや新聞社に負うわけだが、連盟には、かつて夜を徹してつみあげた研究と実践と理論と人がいる。それらを動かして新しいものに体あたりすることで、連盟は生きかえり新しい時代を迎えることになる。展覧会となると、そのお知らせは、いつも

の連盟機関誌のように読み捨てにはできない。期日はいつ、画の大きさはどう、そうして指導した作品の中からそれを選ぶことになるそれが、連盟本部と地方会員とをがつざりと結びつける。幸運でもあった。何か事業をおこなふという失先に、そのようなものの相談をうけたのであった。

その結果、一千万円の第30回全国造形教育研究大会を成功させることになる。それだけではない、例年行なわれる全道大会の会場も既に三年先まできまつているのである。

この委員長をささえるのに名事務局長辻悦平さんがいた。

かつて野村委員長に新妻事務局長がいたように、その時、高橋委員長に辻事務局長がいた。二人は一人であった。意気の合った二人が、連盟がかつて始まつたときのように、新しい連盟を育てるために力を尽した。すべて幸運にみえるそれらは、その結果であった。ちなみに、辻さんは新妻さんの子どもさんである。父子二代、名事務局長というのは不思議な縁というほかはない。

さて、第七代は辻悦平委員長である。現委員長である。

連盟30年と連迷30年

長谷川 傳

「創立の日」皆でうれしかった。

講師の小糸源太郎氏の演技指導は痛烈で、栗野大先輩もコテンパン。痛快だったな。

「脱会」考え方が異ったんで、お別れしたおかげで、創美創設委員として視野を広めることになった。よかった。

「復帰」創美を考える全道大会が札幌であつてから、野村委員長が「帰って来い、お前のしたいようにさせるから」といわれて、ノメノメと復帰、愉快だった。

「いい人々との出会」故人の堂野、長井、新妻、斎藤の諸先生、陰に陽に、私を鍛えて下さったし、伊東将夫さんは、生意気な、伝をやつて、伊藤恵さんは、孤立した私を、励まして下さった。荒木愛さんとは意気投合認めてくださった。金井さんは、才能を充分に発揮しながら、私の行動を容認された。私は酒のときに、野村、和田先輩に教わることも多かつた。二日酔で休むやつはクズだ。

「競争」研究の会だから、研究しないのはだめだ。と伊東将夫さんのことば。だから、連盟の試案としての、体系表・系統表を作るとき、その四、五年前、創美の仲間から、実存的芸術論をにかけて、新しい絵の会が誕生しその影響を反映して、写実主義的内容の主張が、深夜に及ぶ論争を続け、あのようものが誕生した。よかったな。あんな論争は、あ

のと、ほとんどおこらない。

「テレビと飛躍段階」造形の構築を発表したとき、背景には、チゼック、ローエン・フェルト、アルンハイム、ハーバートリード、などを支えとしたものであつたが、TVの普及と子どもの見え方の育ち方は、宇宙的、電波人間を育て上げてしまった。

連盟として、教育界に新しい情報提供が必要と考えられたのは、十余年前になる。見え方の育ちは、人間の眼珠の運動に支えられた、物の見方の指導の転換が早急に解明される事を求めている。

「見える、見せる、見えない」

ものが見えて、自分のものになる量は、三才までの、見え方の育てかたによる。と英国のブレイクモア、米国のペティグラー両博士

「教育を一般化すると」

こんなこと、文部省が、ある主義主張のためにするものが云うことで、オリジナルなものは、自分で生み出すよりしかたがないのだといえ、危険だといひ、皆で仲よくいいながら、本音は誰も信じちゃいない。ひとりころべ皆がころぶ。

地獄に行くのに、誰が付合うか並列思考型の仁も、とくと理解できるのではないのか。その後の眼珠運動のメカニズムについての発見

一九七八年、米国の若い学者グループは、視認の過程における、情報のチェック点で、視走線が飛躍運動を十五度の角度で、短時間それは瞬間ともいえる短い時間であるが数度繰返し、情報の確認をすることがわかった。ゲシュタルトの理論は、この飛躍運動のメカニズムに支えられていると考えるのはどうか。

「よく見てかこう」ということは、直列に視認できるような、教材の選択と、展開が必要であり、よく見せるところ、それは眼珠が選別する情報源についてである。

カリキュラムの展開に、新しい教材観が入り込めば、この子等の仕事は、より充実して

の、異なる国での研究が、ロンドンで、同一実験による研究発表で合体。四年前の学会で世界中にセンセーションを巻き起したものだ。子どもにもよく見えては、その子の目で見ることで、教師の見え方が劣っている場合も多いことが予想される。こわい。

更に、こわいこと。ソ連のヤーバスは「眼珠運動のメカニズム」の論文に、視走線は、直列に走ると仮説し、米国のD・ノートンとL・スタークによって、科学的操作によつて眼珠運動は直列に、情報のポイントをチェックして、視認することを確認した。

これは、ゲシュタルト心理学を背景とする造形理論が、統合的、全体を同時に視認するという理論と異なるものである。全体を同時にということは、視走線の交錯があるからで、現実の運動とは違った論理といえる。

そこで、連盟の情報部としては、全国にききかけて、十年前から直列視認による、事象の認識と表現について、実践的研究を進めてきた。このことは、主として、幼稚園、保育園の教師によつて、子どもの小さなうちに、直列視認をベースとする指導の研究を数多く持っている。

研究事例は、直接私に問われよ。

くるのである。

「前進」

進むということは、固定された概念の周りを歩き続けることではなくて、その概念から離れるために歩き続けることである。

決断はより真実であり、評論はより人為と抽象のうちにとどまる。

「よい趣味は」

よい趣味は理知からよりも、判断からくる。連迷30年

生きることを求めて、それぞれの生き様を示したものの軌跡を、30年積んだから、連盟は、連綿として連迷の仕事をやつてきたものだ。

芸術家を造る活動ではないが、芸術に生きる人生を、自分のものにするために、子どもの一喜一憂に、生存する証を求めたのか。

しかし、ひとりになったとき、そんな事は自慰的で、自分の死を賣の高いものにする訳がない。

森の知神シマフクロウが、死の裁きをカワマスに与えると同じように、オイルの無い明日に、マンモスになって毛を生やすなんて、時が、かかりすぎて面白くない。

素足で、エベレストの頂上で人梯子となつ

「だかが語るばかりの話」

「お前は、馬鹿だ」と、表でも、かげでも、よく言われるので、まことに愉快だ。

世の中にはかしこい人が多いから、お前はばかだといわれる私は、珍しいのかな。それだと貴重だぞ。

理智があつてばかな者はよくいるが、判断があつて、ばかな者は決していない。

時計を持たずに、他に対する類である。

「金ケン政治」へある悪魔の辞典より

権力を金で、あがなうのに、人のフトコロに、手をつつこんでそれを買うものに対し、訓練の結果、作り笑いを浮べて我慢していられるようになったものが、ソロバンを腹の中ではじきあう政治。

又、非合法的に合法的な手段で金を集めて、自分のフトコロが温まったと思える程、腹をすかせた、原生人。と宇宙人のやりとり。

「芸術」の教育(同じく)

それぞれ、審美眼に欠けていることを、賢者に対しては明らかにしてみせ、愚者に対しては、隠して見せないようにするもの。

とどのつまり、自分へのみ許せないことがらは、他人の興味の対象にはなりがたいというものである。

たモンゴールの足は、跡がなくなつて丸太のようだ。

マンモスの足跡が、丸太のようなのは、あのようにして氷河に耐えた証しのようなのだ。

(札幌・東札幌小)

感想

稲市 誠次郎

連盟発足の昭和26年から参加して参りました。全道の研究会を持つために、二度ほど公開授業をした記憶があります。

一度目は昭和27年、北光小学校の体育館を二分して、私が野菜の写生、和田先生がボスターの指導をしたことです。

二度目は昭和31年、大通小学校図書室で「くらしの絵」の単独授業をしたことでした。共同研究では、能力表や学習内容の系統表指導の構築で会合を重ね、夜おそくまで話し合ったことがなつかしく思い出されます。

さらに北海道神宮を会場に一泊のセミナーも忘れることは出来ません。

苦勞したのは連盟の会計で、特に昭和52年の全国大会を無事に終えた時は、ほんとうにほっといたしました。

現在連盟の副委員長として、その責任の重さを強く感じておりますが、連盟の果たすべき役割りや方向を、より確かなものにして会の発展を考えなければならぬと思います。

わが連盟の良さ、特質を上げてみると、
○家族的なつながりの中にも、それぞれが責任を果たしていること。
○幼・小・中・高の縦のつながりを持っていること。

○各サークルとしての活動がきかんどころが多く、それぞれが連盟の研究と結びついていること。
○全道一本の研究団体であること。
○会費が安いこと(サークル二千円、札幌の場合、本部と支部合わせて年額千円)

○連盟としての理論をもっていること。
(過去には連盟のカリキュラムを作った)

○この教科の特殊性でもあるが、高い技術の持ち主や実践家が多いこと。
(札幌・中の島小)

連盟は私のふる里

成田 一男

十年ひと昔と言いますから、連盟の三十年は、むかし、むかし、その昔である。

北一条通りをはさんで、時計台の隣に市役所がある。むかし中央創成小学校がここにあった。私がこの学校に勤務していた二十五年の秋、教育大付属小学校で第一回全道図画工作研究集会が開催され出席した。広い特別教室の机、椅子が全部廊下に出され、膝をふっ付けて、隙間なく座り込んだ。まさしく全道の同志が、膝と膝で連がり、暖かさが全身に伝わって来たのが、今でも忘れることができない。

過去の教育が反省され、これからの教育と美術教育の重要性を次々と、力強く雄弁に語られた。私は弁論大会のような気分であつた。

り、一人ひとりに拍手をしながら、この道に身を投ずる決意をしたものである。故人となつた方々、現職を退かれた方々の顔、顔が、懐しく目がしらに浮かんで来るのです。

当時、流行した古賀メロデー「離れ故郷を想わさる」私の心ふる里は、造形教育連盟である。そして三十年間、バカのひとつ覚えで、この歌だけを歌い続けて来た、この歌が大好きである。
(札幌・美香保小)

三才の造形教育のすすめ

小さいと言うことは何も分らないと言うことではない

荒川 恵吾

おたまじやくしはカエルの子、なまずの孫ではないわいなと言う歌があるが、三才は一年生を以て縮めたものではないのである。三才の造形性は、その感受性に於て、その独創性に於て、六年生に優るのである。ピンカンな事小鳥の如くである。三才の教育は、全く人格そのものの教育である。人格の教育は、ホホエミと人格の生地を以てするより外な

いのである。アメリカやカナダで、ナースリースクールが制度化されているユエンもそこにある。三才の教育のメインは造形である。紙とクレヨンをあてがっただけでは何も始まらないのである。

あのすばらしいタッチを紙はんがにし、ステンドグラスにし、ローラーをすべらせ、スタンピングさせ、点描させ、コンテ、ペインティングと、ジューオウムシンにイマジネーションを走らせることによってこそ、スバラシイ作品は生まれ、人格が成長するのである。三才は又認識の時代である。川と言っても、海と言っても、山と言っても、実際に見ないことには分らない。体験の時代とも言える。

このホープな生活体験とヤクドウする遊びの面白さをマンキツした君のみが、造形性溢れる人間となり、また、科学する人間ともなるのである。三才の教育を考えない教育は、文化国家の教育とはいえない。実際の現状はこの年令の教育は、母親の手にゆだねられていく。しかし母親たちは、唯ウロウロするばかりで路頭に迷っている。

体のことは保健所に相談出来るが、教育の相談をするところがない。一番の近道は、幼稚園の先生方に三才の教育を知ってもらうこと

とである。しかしその道も遠い。旭川大会に集まった幼稚園部会の先生方、殆んど絵の見た方が分らなかった。いよいよ以て連盟の幼児部会が、その解明の端緒に着くべき時でなかろうか。(札幌・愛泉ナースリースクール)

80年代の強力なエネルギー源として

坂田 武夫

私が造形教育連盟と具体的に何かわりを持つようになったのは、昭和31年からである。

以来、中学校部会を通して、一本のくもの糸のようなつながりで今日に至ったのであるが、去る46年度から52年度までの5ヶ年間に、札幌市教育研究協議会中学校部会の運営に関与したことが契機となり、本連盟の運営面や北海道の美術教育界において果している役割の一端を、具体的に実感することができた。

また、全国的美術教育界においては、本連盟が、北海道を代表する唯一の研究団体であることも認識した次第である。

今日、他県における造形連盟のなかには、すでに形が白化しつつあるところもあるやに聞か、私たちの連盟は、確固たる立場と役割を保持していることを、毎年開催される全道大会の様子や、全国大会との連繫などを通して感得できることは、会員の一人として喜ばしい限りである。

しかし、本道の美術教育界の現状は、教育の諸条件において地域格差が目立ち、美術教師間の連繫を一層強めて対処しなければならぬ課題も多い。

私たちの連盟が30周年を迎えるにあたって本道美術教育界の振興に大きく寄与したこと



を再認識するとともに、今後、より将来展望を持った運営がはかられ、80年代の教育課題実現のための、強力なエネルギー源となり、適確な指導実践を方向づけ得る連盟として、充実発展させることを期したいものである。

(札幌・中央中)

小さな草花

高橋 清

家から学校までの間に、目にみえる植物はたくさんあるのだが、聞いてみるとほんのわずかな数しか知らない。それも自分の生活に直接かわりのあるものだけのようである。

昔とはずいぶん違った子どもの生活がそうさせているのだろう。授業で、登校途中にみる草花をもつて来させ、よく観察させスケッチさせる。今まで全く気づかなかったいろいろなことを知って得意な顔をみせる。

次に、縦断横断させ断面を観察させると驚きの声をあげる。不思議だという。今まで見向きもしなかった草花が、こんな仕組みを隠

して可れんな花を咲かせていたとは。

質問が続出し、教室が騒然となるが、目を輝かせてスケッチに力を入れる。未知なものを見つけ出した時の子どもは美しい。自分の持つてきた草花の感想を述べさせると、実によく草花の特徴をつかんでいる。構成と配色も楽しみながら進めた。純朴な子どもは自然の心をよく理解できることを思い知らされる。小さなものの中にも生命をみつけ、力強く生きていく姿に感動し、新たな美を創り出していく子どもたち。

この創造の泉をもつと豊かにしていく努力の大切さを痛感している。(札幌・羊丘中)

新緑

菅原 稜三

前日の雨がうそのように晴れ露にぬれた水々が青々と光り陽ざしがやわらかく肌にあたり春は一ぺんにやってくる

白一色の景色が
まるで競うばかりに
春の色に変えてしまう

そして

木々の枝が一度に芽をふき
一面草木のにおいで覆われる
緑の絵具が一本でたりないようだ

周りの木々をのみこんで

よどんでいる池も描きたい

奥深く続いている

木々の変化も描きたい……

欲張りの私

時間は過ぎる

鉛筆を走らせる

パレットに絵具もでている

いつきに描こう

緑・緑・緑

私はぼう然とした

スケッチでもうせいといっぱい

目のうらには

木々の緑が

充分焼きついてはなれなかった。

(札幌・真駒内中)

喜びのある造形教育

新谷 純 鋪

新学習指導要領における美術(図工)教育のねらいは、あくまでも、創造的な表現活動の喜びを味わわせ、好きにすることにある。

この喜びは、発想する喜びから、構想したり計画したりする喜び、描いたり作ったりする喜び、完成した喜び、また、それらを見たリ、使ったりする喜びなどであり、更に、努力した喜び、新しい経験をしたよろこび、皆と協力できた喜び、ほめられたよろこびなどであるが、その中心は、出来ないことができるようになった喜びであり、見えないことができるようになった喜びである。

この命題は、造形教育三十年の歴史の中で唱われてきたものであり、ことさらに新鮮味はない。とすれば、現代に生きる若者も子どもも個性的に、情操豊かに育ってきた、育っ

ているはずである。しかしそうであろうか。どうも、自己を表現することの下手な、自分の意志を他にゆだねて安穩とし、自己を実現する力を持たない若者や子どもが気になってしょうがない。野放図に自由で、豊かなこの社会の状況に、背すじの寒くなる想いすらしてくる。このような案じ方をするのは私だけではないはずである。

どうであろうか。祝うべきこの二十周年に改めて子どもに立ち、主体的、創造的に生きる子どもを育てる学校教育の確立をめざして「喜びのある造形教育」を実践する必要はなからうか。喜びを味わわせ、造形美術を



愛好する子どもを育てることが、主体的に生きる人間を育成することになるものと固く信じている。

(札幌市教育委員会)

逆に

感動させられたこと

平山 薫

「子どもには感動する場面設定をしてやらなければいい授業にはならないし、良い作品も生まれない」とは良く耳にする言葉ですが実際には私自身あまり感動する方ではないので本当にむずかしいことです。

最近中学一年生に土笛を作らせています。一時間目の授業は導入なので、形どおり試作品の音を聞かせて興味をそそり、そのあと用具や成形の技法をプリントと板書で説明しました。

更に技法の一つは実演で見せてやろうとロクロの水引を見せることにしました。私はロクロをはじめてから一年程しかたっていないのでこんなやり方もあることを見せようと

軽い気持ちでロクロの前に座ったのです。

回転する粘土が私の両手の間から棒状に伸び上ったとき生徒はまぎびく。続いて私の指先から小さな湯のみ茶わんが作り出されると生徒の間からため息がもれました。更にねん土の中央に私のこぶしが入れられて大きな筒形ができ、首をしめられてつぼの形になり、えごてで形が決まり、なで皮で口がととのえられ、切り糸で切られたつぼが停止したロクロから持ち上げられてサン板に乗せられたときは、それまで息をこらして私の指先を見つめていた生徒から一斉に拍手がわきました。

全く未熟で人には見せられるようなものではないのですが生徒は素直に感動してくれてその気持ちに逆に私の方が感動してしまいました。意識しないでやったことが意外な結果を生んだある日の美術室をご紹介します。

(札幌・伏見中)

美術教育におもう

葛西 良子

美術教育を考える時、造形連盟を抜きに考えることはできない。

私自身にしても、何回か出席した大会のあの感激、所せましと展示された躍動的な作品群、輝く子ども達の目、創造また創造の実践発表、そして心にずっしり重くひびく指導助言。

迷ったり投げやりになったりしがちな私の実践をどんなにかささえ、勇気づけてくれたことか。

六年前札幌へ出て来て、北海道の美術教育のために身を粉にして働いておられる先生方に出会うことができた。

心温かく心広い先生方ばかり。こんな先生の努力にささえられ、北海道の造形連盟が三十年も育つてこれたのだと思う。

最近毎日新聞に載らない日がない位、子

どもの非行、登校拒否、自殺等々。私たちの周りも忙がしきに追いついてたてられそう毎日。

こんな中であればある程、じっくり落ちついてものを見つめ、美しいものを美しいと感じる心、そしてそれを体ごとぶつかって自己表現できる美術教育の大切さがとわれる時でもあると思う。

子ども達の声が作品の中から聞こえてくるような、絵の中からとび出してきそうな作品を作っていくような子ども達を育てたい。

そして造形連盟が、いつまでも北海道の心の灯であるように願う。(札幌・新琴似西小)

児童画審査会

伊藤 英世

児童画の審査は、作品数にもよるが一学年を二、三名のグループで受けもち、作業を進めるのが普通である。あら選りでは、一枚一枚作品を吟味する時間的余裕はなく、瞬時にいいわるいの判断をくだしていかなければなら

ない。その判断も人にはたよれない。審査をする者が持つ絵の見方、考え方によるのである。

審査にたずさわって、先輩の先生が選んだ絵に疑問を持つことがよくあった。しかし、その絵を何回も見ていると不思議とその絵がよく見えてくるのである。そして自分が知らなかったその絵のよさに気がつき、選んだ根拠が理解されてくる。選んだ先輩の先生の見方、考え方が伝わってくるのである。少々オーバーにいえば、児童画を仲立ちとして人柄をも知ることができるのである。

自分が選んでいいものかどうか迷っている、隣の先生から「その絵、いいよ」と、ひとこと言われ、ホッとする。そして、そのひとことが絵の見方の自信となってきたものである。

よい絵の定理みたいなものを、作業をする中で先輩の先生から学び、また後輩へと引き継がれていくのであろう。

最近、さまざまな児童画展が開かれ、それだけ審査会も多くなっている。児童画を審査をするということに問題点がないわけでもないが、私にとって審査会は、児童画の勉強ができる有難い機会であった。

これも、私が図工連盟に所属し、連盟の先生方といっしょに仕事をさせていたたいいていからである。

(札幌・新琴似西小)

造形連盟

底を流れるもの

後藤 誠功

毎年夏休みが近づく、私の日程の中には全道大会への参加が記される。新年以来の年中行事のひとつである。

最初は31・32年のころだったと思う。そのころの参加者は、皆汽車かバスだと言っている。最近の状況よりもむしろ盛大だったように思う。全体会の体育館は超満員の熱気でムンムンしていた。その中で野村委員長若々しい挨拶が響き渡っていたものである。

色があり、形があり、立体がありそしてその指導過程には心と汗があり、参加する者の溜息を引き出していた。その実践作品を見るだけで、若かった私の心を刺激し、「よし、俺もやるぞー」といつも挑戦の意欲を甦らせ

てくれたのであった。今でもその感覚は残っている。

参加回数が増えるとともに、旧友やもと同僚などの再会がまたこの上ない楽しみの一つに加えられていった。分科会終了の後、その大会地独特の夜の街を呑み歩きながら、図工美術論議に花を咲かせる。その中から、また新しい感覚を盗みとる。だから分科会以外の交流に参加しなければ損をする、そんな感じを抱いていたのである。

こんな造形連盟の大会の底を一貫して流れているものは、一体何なのだろうか。それはザックランな人間の触れ合いであり、実践に裏づけられた自信のある提示であり、暖かさに包まれた厳しい攻撃であり、若者は言うに及ばず、ベテランをも情熱化させる不思議な魅力なのではなからうか。より新しいものを造り出す」という他教科では真似のできない人間本能を満たしてくれるものが、私を引きつけて離さないものである。

私自身、昭和30年代北空知地区委員を、山本栄蔵先生より受け継ぎ、そして田村幸夫先生にバトンタッチするまでの数年間、図工美術教育の何たるかを直ちに学ばせて貰い、多くの先輩のお世話になりながら歩み続けてこ

れたことに深く感謝するとともに、今更ながら図工美術を続けてこれて、本当に良かったと感じているのである。

時は移り変わろうとも底を流れるものは変わらない。この造形連盟が増々発展充実していくように、我々中軸が頑張らなければならぬと、その意を新たにしているのである。

(札幌・澄川西小)

造形大会と私

蛸子 信也

毎年夏休みが近づいてくると、全道造形大会のことが思い出されます。

「あれからまた一年過ぎたのか」と私の年中行事になったこの大会に親しみの心を寄せることに、ひとつの安心感をいだいています。

ある時「もう何回参加したのかな」と28回の函館大会の紀要をめくってみると、何と14回大会から昨年の旭川大会まで16回続いていることがわかりました。

三、四年前から随分続いてきたなあとは思

っていたのですが、もうこんなになろうとは思ってもみませんでした。

但し、ふり返ってみると真剣に研修に励んだという実感を持てたのはこのうち何回あったかはなほ疑問が残ります。

しかし、知らず知らずのうちにその雰囲気は自分の中に浸み込んで、大きなきずなでできたことだけは確かかなようです。

もうこうなってくると、少々の無理を通しても続けて参加したいという気持ちになります。最近は遠い開催地へひとり出かけていても見慣れた仲間と接し、心のやすらぎを感じることが出来ます。同じ道を志す仲間の温かさにふれ「よお」という挨拶だけで、何か大きな手ごたえを感じ嬉しくなってくることをさえます。

造形大会の楽しさはいろいろあると思いますが、こんな仲間とのふれ合いの場もそのひとつでしょう。

会場は子どもたちの作品で飾られ、ひとりひとりの子どもの努力のあとが参観者にいろいろなることを語りかけてくるようです。

見ている私自身の経験や思い出を引き起してくれる作品、新たな驚きや喜びを与えてくれる作品、様々に語りかけてくる子どもの

親が感じられ、近親感を抱かせてくれます。

自分が苦勞して手がけた題材と同じものなどに出会うと、なお更その感を深くします。

教材商社の展示も色どりを加え、何かめずらしいものがないかと、見て廻るのも楽しいものです。

造り出す仕事の喜びを味わいながら教室へ向うと、子どもたちの真剣な目に出会います。しっかりと物を見る目を養いながら、心にある仕事に接した時「あ、また来てよかったな」と身を引きしめながら造形の喜びを感じるのです。

(札幌・新陽小)

いまの私

鈴木 幸司

今から18年前の、第11回滝川大会に参加したときのこと。

当時、札幌市の西創成小学校に勤めていた私は、同じ職場にいた先輩、佐藤吉五郎先生と共に大雨桶の直後、函館本線不通のため、

今まで通ったこともない支線を経て、滝川にやつとの思いで着いたことを思い出します。

車窓から見える風景は、田畑市街一面、水びたしで、石狩川水系大荒れのすごさを、まざまざと見せつけられました。

や、興奮気味で大会に参加したせいでもないでしょうが、この大会は私にとって大へん内容のあるものとなりました。

それから、第29回今年の旭川大会18年前と向う方向は同じ東北東。車窓からの見える風景は、工業化の進んだ沿線と緑の田んぼ。涼しかった今夏とはいえ、さすがに陽が照ると暑い上川盆地。もつと勉強しなければと思いつつ参加した私ですが、18年前の食いつくような態度で臨んだあのときから顧みて、ふと現在の姿勢をホテルに帰って自問してみます。

この18年間の連盟の活動は、実にダイナミックであり、成果のあるものだと思います。その動きに、ついていけなかった自分が、今となつては悔まれます。

しかし、18年遅れて出発しようと考えている昨今です。

(札幌・白楊小)

子どもと造形遊び

鶴賀 孝三

子どもはからだを通していろんなことを学び、身につけて来ている。

たとえば、雨が降ったあとの水たまりや泥土ができる、そこに近づいては水遊びを始め、あるいは泥んこ遊びから、おかしやさんくだものやさんに変身してしまう。また、砂場へ行くと、山を造る、穴を掘るなどして全身的な活動をしている。やはり、こういう活動こそ、子どもたちは生き生きして、自然的である。

このような遊びは、子どもの自発的、自主的な活動が前面に出てくるが、遊びの中から集中性や持続性が養われるのであって、決して放任的な活動だけではない。

造形的な遊びとは、子どもの自然発生的な遊びの中で色や形・立体感・空間などが育ちまた、そういったかかわりを持つ遊びだと考

えている。それに、こういう過程を通して図画工作科の学習へと発展するのではないかと思います。したがって、この造形活動を通して人間性豊かな児童の育成につとめることが大切である。

ただ、ここで問題になることは、造形遊びにかかわる、施設設備が整っているかどうかということである。しかし、設備が整っていない、それを活用しなければならぬものがない、よごれるとか、きたないなど、決まっていたのでは造形教育はできない。ですから、造形遊びは、思い切った実践が大切なように思われる。

(札幌・八軒西小)

支部の事務局員として

岩間 歳仁

ある図工の会合で、「岩間さん、決まったぞ。連盟の事務局に……」当時、札幌より顔をだしたことのない私だったが、一瞬目の前が暗くなったのも一年半前のこと。一時は

どうなるかと不安な日々を過ごしたが、無気力な私にも旧知の友も多く、アドバイスをうけながら現在に至っている。

札幌支部の事務局の大きな仕事といえば、例会と短信の発行がある。短信は数えて18号の発行をみるが、従来のもち味を生かし、それに新メンバーの裁量で行事が計画されている。事務局担当時は、仕事への不慣れもあり苦慮することが多かったが、最近では不安もなく、支部長を中心とした企画の話しあいにも面白さを感じるようになってきた。

さて、今日は当原稿の〆切二日前、地方への短信発送を終え、自宅の郵便うけに目を向けると、私の所属する東光会からの会報がとどいていた。

森田茂先生(日展委員)いわく「岸に立っている魚は逃げるが、川に入ってその気になると魚は集まる」……何か、私なりに感じるとるものはあるが……。

これからは、自分の持てる力を地道に生かし、連盟の短信づくりに専念したいと思う。

連盟のみなさん、新鮮味のあるニュースををどしどしお寄せください。みなさんのご協力のもと、親しみのある短信にしたいものである。

(札幌・二条小)

造形連盟中学部とは

村谷 利一

北海道造形教育連盟というこの名前が本当に身近に感じられるようになったのは、確か第二十三回室蘭大会でお粗末な提言をしたのがきっかけである。小学校高学年部会絵画で「たしかな日、たしかな手」を子どもに求め、ということだった。以来多くの先輩や同僚の助けを受け、何とか今日まで図工美術の教師としてこれたのではないかと思っている。四年前たまたま小学校より中学校の方へ転勤することになり、造形連盟中学部というものを考えるとき、何かしっくりとしないものを感じている。考えるに中学校の位置づけが定位置にきちんとおさまっていないことが原因なのか。中学校美術部会は、札幌研中学部即造形連盟中学部の形が一番望ましいように勘違いしてしまうくらい札幌研なしでは活動

わたしと造形連盟

藤塚 愛子

私と造形連盟との関わりは、動めはじめのまだ保育に自信が持たず試行錯誤をくり返していた時でした。特に子どもの絵の指導や導入方法をどのようにするのか皆目見当もつかず、先輩の先生がたにお聞しても、好きなように自由に描かせただけでした。それでは子どもの創造性や意欲が育つかどうか疑問を持ちはじめた頃造形連盟で主催した稚内大会に出席したのがきっかけでした。

低学年部会の、熱っぽい討議の様子、後ろの席でコンツと聞いている私にピンピンと伝わってくるにつれ、自分自身の反省と共にこんな保育のやり方ではないいけない、子供に申しわけないと思う気持ちがわきました。それから私は種々な絵の会に出席するようになりまして。創造美術、幼美の会、新しい絵の会等でそれぞれの会の絵の見方、考え方はちがっ

各教科の泉としての 造形道大会

長野 祐平

夏がくると造形大会に参加することが当然となった。四十八年の室蘭大会から旭川大会まで欠く事なく参加し私は勝手気ままな意見を言ったり絵を見てもらったりして教えられ

出来ないのが現状である。事実地方ではほとんどの地区がこんな形でないのかなとも思うのであるが、このことは小学校にも言えること

とは思いますが、我々の所属する団体が造形連盟札幌支部と札幌研中学校美術部会の二本立てであり、日常の実践活動は札幌研の中で、全道的な大会は造形連盟の一員としてという両刀を上手に使いこなす必要があるのである

この使いわけが難しいのであるが、そんなことを今さら根拠を究明したところで何のたしにもならない。きちんとした位置づけがなくとも、大きな大会を毎年開催できるのが造形連盟なのであるから。(札幌・札幌中)

る事が多かった。大会に参加しないと一年古くなる気持ちである。

いつの大会も創造に富んでいる事がうれしい。会場の飾り方にしても授業にしても分科会の運営にしても同じムードの大会に出合った事がない。印象に残っているのは岩見沢大会で造形病院があり問題作品を解説したり工作の実習室があったりした事である。

私の知っている特別教育活動の常任委員も毎年欠かさず参加しているのである。彼は造形大会を参考に特別活動の研究をしているようだ。つまりこの大会には教育の源泉のようなものがあるからだと思う。表面的には一時的のように見えるても学級経営から始まるつちかわれたものが発表されるからであろう。私、個人から勝手な事を言うときミのようなレッスンみたいな事もあっても良いと思う。また、もつと各地域、郡部との交流を多くする運営も欲しいと思う。

せっかくな一つ所に集まるのだからもつと北海道らしきみたい工夫は難かしいだろうか「北海道の子の絵」とか「版画」とか。こんな特色があったらと思うそんな真夏の夢を見せてくれるのも造形大会の良さである。

(札幌・ひばりが丘小)

ていても、子供の絵の表現を伸そうと思う気持は同じなのだと言ふ事もわかってきました。ただ不思議に思う事は造形連盟の先生がたは交流会に出席しても同じ地域同志でかたまつてしまうことです。せっかく仲間と語りあうチャンスを失なつてしまふ非常にもつたないと思うのですが、また、どんな研究大会でも成功させる最大の鍵は人と人との和、相手を心から迎える思いやりの気持が大切な事と思う今日この頃です。(札幌・第一幼)

私と造形連盟

花田 正雄

毎日きまりきつたように私は夕食後お茶を持って書斎に行く。20～30分はただ漠然とどこを見るでもなく机に向う。今日あった事や自分の創作活動の事、友人の事、そして目の前にいる犬の事など……。

そして書架には造形大会の袋が昭和43年頃からのきれいならんである。思い出もあ

る。手にとつてみるとなつかしさがこみあげてくる。造形大会、それこそ全道からあつまつた美術教育の研究大会であり祭りでもある。前に少々記述したが、二年前からふとしたきっかけで、私の家にまつ黒い犬がいる。駄犬、迷犬の類である。実におとなしく気むずかしく、きどりやでもある。だから普段も居るのかいないのかわからなくらい静かである。そんな犬だからいなくてもよきそうなのだがちがうのだ。そばにいる時はふと「おいどうした。おまえは何を考えている」と声をかけたくなる。だからいらないものすごく心の空虚を感じるようになった。そんな我家



造形連盟の明日

毛馬内 国夫

子どもたちとの毎日の新鮮な出会いが、教師の生きがいであると、本当に考えられるようになるまでに、十年を費やした。

その間に、連盟との出会いがあり、新しい角度から教育をみつめる、きっかけをつかんだのは、幸運であった。

体育から図工に変身したのは、実践を大事にする、そこに生まれた事実から学ぶという共通点の他にも、作品を通して「子どもが見える」という、驚くべき事実だった。

子どもの表情や意欲、性格や学級の雰囲気教師の姿勢まで、ずばりと読みとられ、「子どもが見える」深さに、魅了されたのだ。

子どもの製作する姿に感動し、子どもの満足感にひたる姿を想像しながら、日々の苦闘がはじまった。

「子どもをつかむことの大切さ」「育てる」という視点をすえて、子どもの発達を保障する教育が求められている中で、ますます美術教育の重要性が増していると思われまふ。

連盟の未来は、子どもたちを中軸にすえ、教育の道筋を照らす人間が輪になって、豊かな未来をつくりあげる子どもを育てる核として成長することであると考へます。

私の今後の実践の目標として、また連盟の明日として努力したいと、意を新たにしております。

(札幌・東山小)

ふり返ってそして現在

富所 隆

新卒の東山小時代……札幌教研とも連盟とも区別がつかず「何で同じ人達が違う会をする

んだろう」などと思ひながら当時大変お世話になった河野先生に連れられあつちこつちへ行っていました。

なにしろ、連れていっていただき、いろいろな方の独特の手法、指導法をきかせていただき、帰日も送っていただいたのですから、本当に心配のない楽しい日々でした。

何より良かったのは、新米ですから、だまつて座つていれはすむことでした。私は人前で話すのが、大嫌いなのです。(こう言うとなぜか皆さんは笑いますが……)

思い出の中で一番残っているのは、旭川で開かれた、第20回全道造形大会です。そこでの昼の部、夜の部、道中の部で、それからずつといろいろご指導いただくことになった先生方に出逢えたのです。

幌南に来てからというもの、全道大会と本校との研究会がいつもガツチリぶつかる為、連盟にはごぶさたすることが多くなりました。

ところが、私共の授業を見て下さり、分科会終了後、造形大会へとかけつけられる先生方に、頭の下がる思いと共に仲間の有難さを身にしみて感じています。今、私の頭の中は学校、札幌教研、連盟の研究テーマでごちゃごちゃです。もつと学問をして、すっきりさつ

美幌大会のこと

裕子

「先生」と呼ばれる声になれてきた頃には、もう夏の陽が強く照り始めていました。

そのまま夏休みに入り、子どもと離れてしまうのが不安でもあり、とにかくゆつくり休みたい——二つの気持ちが重なり合ったままとうとう子ども達の歓声は校舎から去つていきました。

先生になって最初の夏期休暇は、造形大会に初参加という貴重な体験をさせていだいた想い出深いものです。

新任研と、ちょうど重なった日程の中で、私の若い我がままは、美幌大会参加へと心がかき立てられていました。どちらが今後の自分にとってプラスになるだろう——など、今思ひますと、大変気負った考えで校長先生にお願いしたありさまです。

美幌で見たことは、私の好奇心や意欲を満



足させてくれる素晴らしいものでした。

「牛を描く子ども達と絵」土や緑の香りが漂っている作品、指導の先生と子ども達の心がよく合う版画——そして道内各地、道外から集まった先生方の熱い視線、ちよつと張りつめた討論、その一つひとつに心を動かされました。

それから五年——コンクリートやアスファルトに囲まれた中で、何とか心の触れあうもの、そこに生きる「自分の香り」を感じさせるものを求めてきました。

年々大会の規模は大きくなってきたように思われますが、美観大会は私にとって最大の

ものなのです。(札幌・南月寒小)

鬼と交戦中

菅原清貴

教師生活三年と半。たのしき、難しさが、しだいに身にしみてきた今日この頃。時に思いつくのは、初めて図工の研究授業をした一年目の初夏のこと。

「大きな木」を描かせようと意気込んだ「ペーバー教師」(現在も同様)は、目新しいことをやってみようと、色ジュースをつくり、毛糸にそれをひたし、先に描いてあった太い幹や枝に、「ほそい枝を加えよ」と「命令」ところがフラフラ毛糸が、ゆらゆら、おまけにボトン、ボトンとえのぐが、おもわぬところにしたり落ち、これが木かと思うような「奇木」が、つぎつぎ出来あがり、おまけに時間オーバー、もどった職員室の戸の重かったこと。我に返り子ども達の心になつて考えるに、りっぱに描き進んでいた幹や枝に、チ

ヨロ、チヨロの枝をつける無理難題をかせられ、さぞ小生が「鬼教師」に映ったことかと思ひ、我が未熟さにガツクリ。

その後も「鬼教師」として、子ども達の前にいつしれず立ちはだかること数知れず。そのたびに、獅子の前にすくむ子鹿のような作品の群に遭遇し、自己嫌悪。

「そうなんだよな、子ども達の心の扉を全開にして、造形活動をさせてあげなければ、子ども達の目や、手や、体は、自由にはばたいてくれないんだよな」と考えるのだが……。

それでも「鬼教師」は、なかなか、退治されず「我が内の鬼ども」と今もなお、交戦中なのです。(札幌・東月寒小)

美術教育を支えるもの

広沢正俊

先日、ヨーロッパを旅行したときのこと、デンマークのコペンハーゲンで、いろいろな家庭をみました。

は何故だろう。

キャンパスの一隅にすぎない一つの色が生きること。それはひとりの子どもが生きていることだ。絵の美も、学級集団の美もそこにある。ひとりひとりの児童が学級で生きること、それは絵の一隅の一つの色の存在感と同じだ。学級経営とはひとりひとりに存在感を持たせることだ。絵の一つの色の存在と似ている。絵を描くというが、13年目にして今、絵を造るといふ感覚の昨今である。

(札幌・南月寒小)

色の存在感

富田泰

新学期、学級の子どもと対面した時は、新しいキャンパスにむかつた時の感じにも似た「さあ、よし、さあてな……」という気持ちにさせられる。

子どもたちは真白なキャンパス、いやあのモンドリアンの分割された美しい気持ちのよい色がすでにある。色づき始めたホオヅキだ。パミリオンでも様々だ。そんな色づいたものだけれど児童数分に仕切られたキャンパスの絵づくりが始まる。

就職絵づくり13年。13枚の絵を造ってきた。色合いの違いはあるが、さてあまり変わりばえせず、新任のころとあまり変わっていないの

どの家庭も、調和のとれた形のインテリアで構成され、家具から日用品に至るまで、その配置や色彩の調和のいたるところに、心にくいばかりのセンスのよさというか、工夫がみられたのである。聞くところによると、この国では美術という科目が学校には全くないとのことで、親が子へ、その子が、又その子へと日常の生活を通して教えられていくとのことだった。決して裕福な家庭ばかりではなく、下層の人々の家まで、その様な美しい構成がなされていたのである。

さて、日本の家庭はどうであろう。小学校では図工、中学校で美術、高校でも習う生徒がいるのだが、果して9年間12年間で培われたデザイン教育の成果が、本当の身近な家庭の空間で応用的に表われているかという疑問でならない。

中学校や、高校を卒業すると「はい、さようなら」ではないだろうか。確かに最近のインテリアやデイスブレイにはセンスのよさがそれぞれ活かされてきているといえるが、何かピント外れの相を呈しているような、気がしてならないのである。

デザインの根本的な精神(生活を築く、個性のある空間、創造心を高める空間等々の



編集後記



▼編集は一見機械的にみえるにちがいない。が、実はちがう。

いろいろなしながら原稿の来るのを待つ。待ちくたびれて、それでも原稿が来ないと、あの手、この手と催促を考える。しかも遠慮したいの催促である。

原稿が集まると、いつだって半分はできたと同じだ。そうして、あとは編集陣の腕次第というわけ。

中でも校正は難題中の難題で、

もう間違はないというのが間違いで、それも、よくいつてあたりまえなのだからつらい。

わたしは、この度は、そういう一切のつらさからのがれて、金井さんからの電話に、「くろうだね」といったのであった。それなのに、十年誌よりも二十年誌よりもよくできそうでありがたい。(伊藤)

▼記念誌編集の一員に名を連ることになり緊張した。新鮮で味の濃いうユニークなものと心がけた。

▼こんな機会にはめったにない。誠心誠意その任にあたったこの一年だった。

▼外は雪、今年は雪がすくなくと言ったのが、どか雪のとしとなった。新卒で初参加の滝川大会で友人と熱心に参観した事が昨日のようだ。造形連盟も30歳、壮年に入る。30回記念誌の編集にさきやかながらお手伝いできて嬉しく思う。(香西)

▼原稿から造形の仲間の息吹が伝

わる。それをそのまま編集したつもりだ。(吉田)

▼野村、伊東、高橋、伊藤外先達諸賢の造形連盟誕生にいたる経緯・エピソード・研究の充実、能力体系・系統表作成にいたる充実した討議とその拡がり。聞き手にあった私だが久ぶりに充足した。三十年も前のことがほんとうにきのうのこのように詳細で鮮明だった。素晴らしい仕事に出会ったことを感謝する。(東志)

▼最後の最後まで表紙のデザインを練る。意義ある連盟の精神をどう形象するか、それだけに精を盡した。(佐野)

▼全道に誇る素晴らしいスタッフのみなさんとお仕事ができ、こんなにうれしいことはない。足りないところが、ずい分ある。イメージは走るが何分にも時間と体力がゆるさない。全道の造形の仲間の美しさを綴りえたかどうか。本誌執筆にご協力くださった皆さんに乾盃して編集をおえる。(金井)



編集委員

金井 秀男 (札幌月寒小)
鈴木 将夫 (札幌和光小)
吉田 俊雄 (札幌西野小)
岩間 隆 (札幌二条小)
東 志 (札幌北展中)
佐野 千尋 (札幌羊丘中)
加藤 五十和 (札幌北展中)
西 富士男 (札幌藻岩高)
香 恵 (札幌東山小)
伊藤 小 (札幌稲穂中)
小林 小 (札幌稲穂中)
北海道造形教育連盟 30周年記念誌
昭和五十五年二月一日 印刷
昭和五十五年三月十五日 発行
発行者 北海道造形教育連盟
代表 (委員長) 辻 悦平
発行所 札幌市立白楊小学校
事務局 札幌市立南月寒小学校

北海道造形教育連盟規約

一、名称と目的

本連盟は、北海道造形教育連盟といい、本道造形教育の振興をはかるをもって目的とする。

二、事業

- 1 本連盟は、目的を達成するためつぎの事業を行う。
- 1 研究会・講演会・展示会等の開催及び後援
- 2 造形教育に関する教科書・教材・教具等の研究
- 3 機関誌「北海道造形教育」の刊行
- 4 他の造形教育団体との連絡提携
- 5 その他造形教育振興上必要な事項

三、会費

正会員 本道幼・小・中・高・その他これに準ずる学校の教職員
賛助会員 本連盟の目的に賛同するもの

四、組織

サークル 本道各地にサークルを置き、会員は原則としてこれに所属する

五、構成及任務

- 1 役員 委員長 一名 本連盟を代表する
副委員長 若干名 委員長を補佐する
会計監査 二名 会計の監査をする
- 2 委員 地区委員 地区二名 地区サークルを代表する
常任委員 若干名 本連盟の運営に当る

六、選任

- 委員長、副委員長、会計監査は委員総会で選出する
- 地区委員は地区サークルで選出する
- 常任委員は委員長の委嘱による
- 顧問は委員総会において委嘱する

七、任期

役員及び委員の任期は一年とする。但し重任を妨げない

八、会費

○総会 必要に応じて開催し、連盟事業につき協議する

九、会計

○委員総会 役員、委員をもって構成し毎年開催する。役員
の選出、予算、決算及び年度計画等につき審議する
○常任委員会 役員及び常任委員をもって構成し、連盟の事業
を執行する

一〇、事務局

本連盟の会計は、会費・事業収入及び寄附金により執行する
会費 正会員は一人年額百円を納入するものとする
サークルは年額一千円を本部に納入するものとする

一一、事業

- 事務局は事務局長在勤の学校におく
- 事務局に次の五部をおく
総務 庶務 会計 研究 編集
- 事務局長は常任委員中より委員長が委嘱する

一二、年度

本連盟の事業並びに会計年度は四月に始まり翌年三月に終る
本規約の改廃は委員総会の議決による (昭和四十四年六月二十
二日改訂)

